

White

Notes



Index

I. レインコートさん*

p3~

II. 追想曲

p80~

III. 赤の狩人

P153~



【Case 1 はじまり】

『レインコートさんって知ってる？』

『知らない。何それ？』

『西棟の古い国文の資料室あるじゃん。今はゼミ生しか使っていないところ。あそこに殺したい人の名前と理由と特徴？ ……だっけ、書いて置いておくと黄色いレインコート着た人が殺してくれるんだって』

『何それ、こわー』

『都市伝説でしょー。実際名前書いても殺してくれなかったって話もあるじゃん』

『そこまでして殺したい人っている？』

『私、元カレかな』

『 안타、自分で殺しそうじゃん！』

今朝の女たちの会話を思い出して気分が悪くなった。酷く滑稽でくだらない。気味が悪い。

目の前で死んでる女の方がずっとずっと綺麗だ。白い肌に赤い血が広がって、まるで彫刻みたいに輝いている。美術品と呼びたくなるほど愛おしい。

最後に白百合を一輪抱かせて仕上げた。生きていたら叶わない美しさ。

ずっと見ていたけれど、そろそろ姿を隠したほうがいい。僕は「都市伝説」の「レインコートさん」でなければならぬんだ。

僕はこうやって人を殺しているわけだが、ただ「人を殺した」「なんていう馬鹿みたいな猟奇殺人鬼じゃない。僕は人の死に魅了されている。」

小学二年生の時だった。従姉妹が祖母の家の蔵で首を吊って死んだ。

僕はそれなりに彼女のことを好きだった。もちろん恋愛感情じゃなくて面倒見のいい歳の離れた彼女が好きだった、ということだ。歳が離れている分、母親よりも近い、大人だった。だけれど彼女は十八歳の若さで首を吊ってしまった。

僕が第一発見者だった。

暗い蔵のなかで小さな窓からうつすら街灯の明かりが入ってきて、ぎい、ぎいと揺れる体にあわせて柱が鳴っていた。いつもよりおねえさんの体が大きく見えた。今も鮮明に思い出せる。

セーラー服のおねえさん。

感動という言葉はしらなかったが、あの時の僕はたぶん感動していた。暗闇のせいか、顔が見えない、だから美しい。揺れる死体を見て僕は彼女に恋をした。

僕はその高揚を忘れないように毎日、スケッチブックに光景を描いた。あの暗い空間を描くのに黒いクレヨンだけが擦り減っていった。

スケッチブックが一冊終わるころ、母親は僕を心療内科へ通わせ始めた。

死を目の当たりにして心に傷を負ったかわいそうな小学生の男の子だ。僕はかわいそうなんかじゃなく、欠けていた感覚が戻ってきたような、そんな幸せを感じていたのに。僕はこの感覚を誰にも奪われたり消されたりしないように「かわいそうな男の子」を演じようと決めた。

中学生になると「都市伝説」に嵌った。

ファストフード店のバーガーが安いのは犬の肉を使っているからだ、とか、耳たぶから出た白い糸を引っ張ると失明する、といった「ありそうでない話」よりも「隙間女」や「人面犬」

「紫ババア」なんかの「いるかいなにかわらないけど怖い話」を好んだ。友達と怖がりながら読んだ。登下校時、誰がいち早く新しいネタを持ってくるかで競った。その夜は少しだけあいた筆筒の隙間を凝視して眠れなくなったりもした。

高校生になったばかりの頃、友人たちは都市伝説や怖い話を笑うようになった。僕は合わせて笑っておいた。

だけど僕にとって「語られる」ということは、「記憶に残る」ということでもあり、「生きていく」ということだった。だからここでもやはり、僕の大事な感覚を殺さないために、徹底的に「普通の高校生」を演じた。

サンタが両親であり、口裂け女はただの哀れな女性でしかなかったように、種を明かせば他愛のないものなのかもしれない。だけど僕は忘れたくない。揺れる肢体を見て爆発的に起こった興奮と感動！

今もあの時のことは思い出せる。だがそれは「記憶」だ。僕がここまで生きてくるのに必死に守りぬいてきたあの興奮が色あせていく！ 僕の一部が、消えていく！ もう彼女に関する生前の記憶もあいまいだ。どんな髪型が好きで、何色が似合っていて、何が嫌いで……思い出せない、思い出せなかった。セーラー服の似合う少女は死んでしまった。

死んだゆえに、忘れられてしまった！

僕は、そんなふうに忘れられたくない。恐怖の対象として、いつまでもいつまでもいつまでもいつまでも、誰かの記憶の中で「生きて」いたい！

僕はこのころ、都市伝説に「なろう」と決心した。そして僕はあの時の興奮を上書きしていきたくとも思った。

僕はできるだけおとなしく、普通の高校生を演じてこの大学へ入学した。地元からは誰も進学しそうにない大学。

思った通り、僕と同じ出身校のやつはいない。実家から遠く離れたこの場所に、僕をよく知っている人なんて一人もいないのだ。僕は現在の僕へとなるべく計画を進めることにした。まず一人目を殺した。入学してから前期いっぱい綿密に計画を立てた。

最初の殺人は、後期に入ってから二、三週間してからだった。

大学に遅くまで残って、人気の絶えた時刻、残っていたやつを鉄パイプで殴った。

何度も何度も何度も何度も殴った。多少、抵抗されたけれどもそんなことより楽しかった。血が飛び散って、多少汚くなったけれど、驚愕した表情が怒りに変わり、最終的に絶望へ移り変わっていく様は見ていて興奮した。

何事も初めてはある。計画より時間もかかったし、汚くなつたが、まあまあ出来だろう。

おねえさんを見つけた夜の興奮を少しだけ取り戻せた。けれど全然足りなかった。今まで半年とちよつと想像しつづけ計画を立て、実行したくてたまらなかったことをやつと実行できたうれしさに笑いが止まらなかった。

真夜中、警備員さえいない時間に僕は笑った。

遺体と僕。静かになった校内で帰ろうと踝を返した時にふと、傍らに咲いていた花が目に入った。

花の名前なんて知らない。僕はそういったことに詳しくない。ただの雑草なんだろうけど、僕のために死んだ彼に敬意を表して、その花をちぎって胸の上に置いた。

名前も顔も人生も友人関係も何も知らないけれど、ありがとう。

次の日、大学に行くと通行禁止の黄色いテープと人だかりの向こうに血まみれのガーベラが落ちていた。

死体はもう持って行かれたのか。

まあいいや。泣いてる女がたくさんいた。男もいた。こそこそしやべるやつもいた。だけれどそいつらの声は僕の耳には届かなかった。どうだっていいんだ。そんなことは。

一カ月くらい経ったか。校内で死んだあの男の事はなんとなく禁句へとなっていた。暗黙の了解と言うヤツだ。

こうやって忘れていかれる。あの男のことを今も思いだして嘆くのは家族と近しい友人だろう。それでもいつか近しい友人だって、恋人だって忘れてしまう。風化していく記憶は脳内に記録としてのみ残り感情や感覚はもう思い出せなくなっていく。

僕は二人目を殺すことにした。僕の存在は記録なんかじゃだめだ。もっと生々しくもっと近くそばに或る恐怖でなくてはいけない。

二人目は校外で殺した。

校内で殺してしまおうと最初の男がまた思いだされる。何度も何度も思いだされることで男の記憶は移り変わって行くような気がしたからだ。大勢の人が思いだし、口にすることで死んだあいつは存在が曖昧になって行く。そんな気がした。

今回はどうやって殺そうかと考えたが、包丁にしてみた。

暗い路地で女が来るのを待つ。

誰でもいい、一人で、殺しやすいやつ。コツコツとヒールの音がだんだんと近づいてくる。

僕は女の叫び声が嫌いだ。だからまず喉を切り裂いた。

思っていたより血が吹きだしたが、まあいいか。

女は喉元を抑えて苦しそうにしている。声が出ないようだ。それでいい。

路地に引きずり込んで、転がした。うごうごと両手を動かしているけれど、その姿が醜く見えて、さっさとうなじに包丁を

刺した。

結構固いな。でも刺せないほどじゃない。

気が付いたら女は静かになっていた。

楽しい夢を見ているような気がした。表情も声も思いだせた

けれどスローモーションみたいだ。

女っていうのが原因かな。おねえさんは女性だったからな。

そんなことを考えながら僕は返り血でドロドロになったパーカ

ーを脱いでその場で着替えた。包丁を丁寧にタオルで包んでリ

ュックに押し込んだ。

あれ以来僕は、僕のために死んでいった人に花を贈ろうと決

めたんだ。今日は女性に合うように綺麗な花にした。そのため

に女を選んだ。

君が氣にいいといいんだけど。君は今、最高に美しいよ。

ところで君は誰なんだろうね。

「それは遠慮しところかな」

ちよっとキザだったかな。

周りの女が騒いだ。

『困ってるじゃん』『ごめんねーこの子バカだからさ』

煩いなあ。お前らの頭にはオガクズしか詰まってないの？
僕は困ったように笑っておいた。

計画ももう終盤だ。

十二月に入ったばかりで、早朝でも寒かった。

大学の校内で、もう一人殺した。建物に囲まれた中庭。今度はロープを持ってきた。ここは園芸部の奴が朝早くに来る。一人だ。

ああほら、きた。

僕よりずっと身長が高かったから、ロープを巻きつけるのに苦労した。思った以上に暴れられた。それでもどうにか首にか

けたロープをつかんで引きずり倒した。

これはいい方法かもしれない。まず声が出にくい。でも顔が崩れやすいな。気持ち悪い。

抵抗が無くなって死体になった男は、花壇に倒れた。

椿の花を男に添えておく。

ロープを回収していると、叫び声が聞こえた。まったくデリ

カシーに欠ける騒音だ。

振り返ると女性教員が立っていた。

僕は何も言わず彼女をじっと見た。今日は黄色のレインコートを着てきた。深く深く、記憶に焼き付けられるように。

そう、僕はこれを待っていたんだ！

目撃者になってくれてありがとう。

この光景をこれからいろんな人に話すんだ。警察、大学関係者、友人、よろしくお願いします。

女性教員はカタカタと震えていた。生きてる女性は美しくないな。そろそろ引き上げないと警備員がやってくる。

僕は中庭から出てトイレに隠れた。バタバタと誰かが走り過ぎる音が聞こえた。それが段々雑踏へと変わって行く。

馬鹿な奴らが死体に注目している間に、僕は監視カメラの死角を通過して大学から出た。コンビニや道に設置されたカメラの位置も気にしながらアパートへ帰った。

今はただ一睡の眠りが欲しい。

目が覚めて、もう一度アパートを出る。今度はカメラにちゃんとうつるように歩く。コンビニも、道路のにも、大学のにも。僕は今、登校したんだ。平凡でまじめで目立たない、ただの大学生だ。

中庭の横を通ろうとすると警察官と野次馬でいっぱいだった。あの女性教員の姿はなかった。今頃はきつと警察で事情聴取でも受けているんだろう。

次の計画は、噂を定着させることだった。しゃべりたくてうずうずしていたけれどじっと耐えた。

年が明けて、一月に入ったころ、小さなネットカフェから掲示板を探した。こういう事件が起こると、ミステリーオタクは喜んで掲示板を作る。やはり、花を置いて行ったのが効いたのか掲示板ができていた。

『この間、大学で起こった事件の時も花おいてあったんだよな』
『連続殺人かねえ』

『目撃されたらしいけどな。犯人』

『噂じゃ目撃した先生、精神病院に入ってるとかww』

『まじかよwww』

『どんな姿で目撃されたんだよ！ kws k』

『レインコートだったんだってよ。顔は見えなかったらしいけどな。』

『こええwww』

いい具合に適当に話が進んでる。僕は慣れないタイピングで書き込んだ。

『依頼できるらしい』

『お？ 新しい人か。依頼？』

『噂だけど、大学の資料室に依頼書置くと、あのレインコートが殺してくれるんだってさ』

『いいなww俺もやろうかなww』

どこの大学とは名指ししていなかった。僕はそっとソファに背中を預けた。

黙って更新されていくのを眺めていると、三時間後には『大学の研究棟、西側の資料室に殺してほしい人の名前と特徴と理由を書いて置くと叶えてもらえる』なんていう噂が出来上がった。僕が都市伝説になった瞬間だ。

冬休みを挟んで西棟の資料室に行くと、案の定手紙がたまっていた。おそらくこのあたりの大学では、噂を聞いて同じような現象が起こっているだろう。手紙はどんどんたまっていた。

ある日、レポートをまとめるために資料室へ入ると、初老の先生が手紙をまとめていた。

「ああ、先生、こんにちは」

「……ああ、君か」

「手紙、ですか？」

「最近、噂になってるだろう？　レインコート男の話。うちではいろいろあったからねえ」

「気持ち悪いですね」

「まあなあ」

「……よかったら僕が片づけておきましようか？　僕ここ、よく使うので」

「頼んでもいいかな？」

「はい。適当に捨てておきます。」

「よかった。よろしく頼むよ。」

こうして僕は正攻法で手紙を入手する方法を手に入れた。ここまでで僕の大学一回生中にやるべきことがすべて終わった。

僕は依頼された人を次々と殺した。どんな奴でも殺した。

僕には関係ないけれど、手紙の中に書かれた理由を暇つぶしに読むこともあった。僕にはどうでもいいけれど、人は人をこんなにも嫌いになれるんだと思った。恨み、悲しみ、怒り、行

き過ぎた愛。

人間っておもしろいな、と僕はぼんやりそう思った。それでもやっぱり僕には、どうだっていいことだった。それでも人は簡単に死んでいった。

たくさん殺したけれど、中でも思い出そうと思えば、思い出せる人物が二人いた。なんでかな、なんで覚えてるのかも分からないくらいだけど、なんとなく覚えている。

やっとアパートについた。今日もよく眠れそうだ。

【case2 薬物中毒】

『レインコートさん』というのが噂になっているらしい。

なんでもレインコートを着た殺人鬼らしく、実際にそれに見た人間もいるそうだ。

追っかけだかマニアだか、そんなものもいるらしい。そいつが『レインコートさん』について興奮気味に話す姿には、正直引いた。

実際に人も殺されているっていうのに、そいつの関心はあくまで『レインコートさん』だ。殺された側の理由なんて、誰も知ろうとしない。

どれだけ身近で殺人事件が起きようとも人は忘れる。いつしか次々と起こる事件に埋もれてしまう。時々メディアが思い出したように取り上げ、そういえばこんなことあったかな、と思

うくらいだ。

にしても、『レインコートさん』は都市伝説にしては現実味が
ありすぎた。

今までの都市伝説はどこか遠くて古ぼけていて空想じみたところがあった。それに比べて『レインコートさん』は、愛称こそかわいらしいものの、舞い込む情報の多さは、自分たちのすぐそばにいると思わせるほどリアルさがある。

殺人鬼が身近にいるという恐怖は、興味はなくとも感じることはできる。俺は彼についてぼんやりと考えていただけなのに、いつのまにか彼という存在を一生忘れることができないうんじやないかと思うほどに記憶に刻み込んでいた。

『レインコートさん』に何らかの方法でお願いすれば、本当に嫌いなやつや憎いやつを殺してくれるらしい。

例えば、二年上の誰からも嫌われ、麻薬にも手を出していた

らしい先輩。

本当にレインコートさんの手にかかったそうさ。

俺自身に被害はなかったものの、その先輩は同級生にも後輩にも手ひどいことをやっていて、相当恨まれていたそうさ。そして彼らが望んだように、先輩は無残な死に方をしたらしい。

又聞きが多く、真偽は確かではないものの、『レインコートさん』の恐ろしさを自分に刻み込むには十分だった。

結局俺は興奮気味に『レインコートさん』について語るやつと同じように、彼がどんな奴なのか、どうやって殺人を起こしたのか、そんなことばかりが気になり始めて、殺された人のことなんてこれっぽっちも気にならなくなった。

わかったことはこの大学の研究棟のどこかの教室に、殺してほしいやつの名前と特徴なんかを書いた手紙を置けばやってくれることだけだった。

俺は自分の名前がないだろうかと少しばかり心配もした。自分
分はひどい人間だろうか。記憶にないような小さなことで殺さ
れるなんて、ばかげている。しかし嫌がらせを受けたほうはい
つまでも覚えていなのだ。

そのうち自分もいつかは『レインコートさん』に殺されてし
まうかもしれないと、おびえるようになった。人から恨みを買
えば殺されてしまう。人に迷惑をかけない生き方なんてどんな
に気を付けてもできるはずがない。ここにいて誰かが殺される
かもしれないというリスクを背負って生きているのだと解った
時、俺は家から一歩も外に出られなくなっていた。

*ここまでを会話にするか、その他の形にするか
次の話題へとどうつなげるかを考えて。やっぱり別人の話に移
るにはなにか工夫が必要。

これで何件目の殺人だろうか、そう多くはないはずなのに忘れていて。

廊下を歩いていてふと窓ガラスに映った自分を見ると口の端がゆがんでいた。でもこれで満足したわけではない。僕はやらなければならぬのだ。

都市伝説になるために。人の記憶に深く刻み込まれ永遠に語り継がれる存在に。

目の前の男を殺してほしいと最初の手紙が来たのは数か月前だったか。文面からひどく恨まれていることはすぐに解った。

恐喝、暴行、授業に出ずにサボることは当たり前。ただサボっているだけならまだしも、代返を気の弱い人にやらせていた。その上テストが近くなれば、まじめな生徒からノートを奪い、自分だけ悠々と単位を取ろうとするのだから、嫌われて当然だ

ろう。ゴミみたいな人間だ、と書かれてすらいた。
 その後もおそらくそれぞれ別の被害者からである手紙が置かれて、こんなに人に恨まれているようなやつも珍しいものだと感じてしまった。

どんな方法で殺して、僕の夢への礎にしてやろうかと久しぶりに期待に胸が躍った。この男に合わせた最高の殺し方を考えようと決めて、ようやく決行できる準備が整った。

その日も男は自分で稼いだわけでもない金で薬を買い、家に帰るまで我慢できなかつたのか、その場で薬に手を出した。薬の使い過ぎで体に抗体ができているのだろう、どんどんと次のものに手を出すまでの期間が短くなってきていることは少し調べればわかった。

どうせ人も来ない場所だからと安心したのか、恍惚の表情を浮かべながら腕に注射を刺している頭のいかれた男を、学校の

そばにある廃倉庫に連れ込むのは、それほど手間がかからなかった。

三日間、食事も水も与えず、クスリが切れるのを待った。男は頭も正常に働かないのか、自分の置かれた状況さえわかっていないようだった。

男の様子が変わったのは、僕が彼の様子を見に来て数時間後だった。日は落ちて、頼りない白熱電球の明かりだけが僕と彼を照らしていた。

「く、すり」

不意に男はわめきだした。

彼の眼には自分の体を這う無数の虫が見えているのかもしれない。体中かきむしって狂ったように大声を上げた。

意味不明の言葉をわめき続ける彼の姿は、見せ物としてなかなか面白かった。薬物依存の末路はこんなにも滑稽なのだ。

彼のズボンは濡れ、椅子の端から液体が伝って床にシミを広げている。

彼の目に、僕はどう見えているのだろうか。さながら死神だろうか。レインコートを着た死神だなんて女子中学生が飛びつきそうなカワイイキャラクターになるんじゃないだろうか。

「……くすり、くすり」

どうやら体力も限界を迎えつつあるようだ。項垂れながらうわごとを繰り返し、うつろな目には涙さえ浮かべていた。

意識を失いかけていた彼にバケツの水をぶっかけた。

きっと今僕は残酷な笑いを浮かべているに違いない。なんていったって、数か月も考え抜いた、彼にピッタリな死に方を今から実行できるのだから。自分の欲望が満たされる瞬間が今まさにそこに迫っているのだから、笑ったっていいだろう。

「クスリがほしい？」

こんなことを聞く方がバカかもしれないけれど、哀れな彼にはそんなこと考える余裕もないだろう。案の定彼は力なく一度だけ頷き、叫びすぎてかすれてしまった声でクスリ、とつぶやいた。

彼の目の前にこの殺人に必要な材料を広げると、面白いぐらいに男の目の色が変わった。口をだらしなく開けて驚いている。

それはそうだろう、彼の目の前には今のどから手が出るほどほしがっているクスリが大量においてあるのだから。

「これ、全部君のものだ。これはなんて呼んでるんだっけ、シル？」

切手のように薄いペラペラのもの。これも立派な麻薬の一つで、案外簡単に手に入ったものの一つだ。

そういうえばこれ売っていたいわゆる売人は僕を見て「まじめそうに見えるのに」と笑っていたような気がする。

エンコーヤってるオヤジかよ？ 俺はとりあえず愛想笑いを返しておいた。

「こっちはスピード、これはMDMA？ 覚えきれないほどたくさんあるんだね」

本当は全種類集めてやろうかとも思っていたが、学生の本分にはすこし無理があった。

母親から金を借りるなんてことをすれば、彼女はきっと僕がいじめられているんじゃないかって変な風に心配して、計画の邪魔になるようなことをするかもしれないと考えると、やはり自分の財布の範囲で集めるしかなかった。

今回の殺人方法の汚点はこの資金が足りなかったことただ一つだ。

クスリをいじりながらそんなことを考えていると待ちきれなくなっただのか、男はどこにそんな体力があったのかと思うぐら

い再び暴れ始めた。濡れた髪からしづくが飛び散って新しいしみを床に残していく。

こうなったらまた彼の体力が限界になるまで待つだけだ。僕にはいくらでも時間はある。でも彼には一分も猶予はあるだろうか。

人は案外しぶといものだとつくづく思う。死ぬ間際になっても何としても生きようと抗う。殺す際にそんなことをされるとただ面倒なことだと思っただけだけれど、彼のしぶとさを見ていると思わず尊敬してしまいそうだ。

待っているのも飽きてきて、適当につかんだクスリを持って男の前に立った。クスリを左右に動かすと男の目も同じように動いて、少し面白かった。

「……欲しい？」

聞けばすぐに返事が返ってきた。

口を開くように言って持っていたものを舌の上に落としてや
った。欲しがっていたものをようやく手に入れられた喜びに男
は震えた。

クスリって即効性だったかな、と男が求めるままにクスリを
口に運んでやりながら考えた。どうせもうこれらを使うことは
ないから、クスリについて知る必要もないかと考えることをや
めた。

「暴れないなら、ロープを解いてあげる。クスリももつとあげ
るよ」

クスリの快感に身を浸している男には、僕の言葉は聞こえて
いないようだった。

これでいい、右も左もわからない状態になれば僕のこの計画
もようやく終盤を迎える。思った通り拘束を解いても男はこっ
ちに向かってくることはなく、うつむいて何かぶつぶつと呟い

ていた。クスリを置いた台を男の目の前に運んできてやって、僕は倉庫を出た。

そういうえば彼の最期を飾る花を決めていないことに気が付いた。

殺す方法ばかりに気が向いていて、重要なことをすっかり忘れていた。こんなところだけ間抜けな自分に笑いがこぼれてしまった。止まらなくなった。

また一つ、僕の偉大な目標の礎が、あと少しで完成する。

【Case 3 毆殺】

『○月○日未明、アパートで男性の死体が発見されました。死因は薬物の過剰摂取で、遺体のそばには花が置かれてあった模様です。警察は自殺と事故両方の線から捜査を――』

どいつもこいつも馬鹿ばかりだ。煩わしいローカルニュースのアナウンサーの声にテレビの電源を落とす。殺人でもない事件をわざわざ報道するなんてと思わないでもないが、事件が起きたのはこの辺らしい。

高校生の頃、何着も買ったカッターシャツに袖を通す。メーカーはバラバラだし何年も前の物だから、バレることはない。『仕事』のときはいつも高校の制服っぽいのを選ぶ。ボタンを一つ留める度、『仕事』に対する士気が上がる。カムフラージュのために選んだこの格好は今や戦闘服、これがあるからわたし

は堂々と『仕事』を遂行できるのだ。なんて言ったらいいのかな？ 相棒みたいなものだ。

今日の獲物、店、人通りを脳内でシミュレーション。何度か『仕事』をしたことのある店の近くだから大体のことは把握している。

ハンガーに吊るしたプリーツスカートの中から紺のチェック柄を手取る。極細で赤いラインが入ったそれは可愛らしいが、あまり目立たないデザインでちょうど良い。派手すぎると目立ってしまう。

つけ睫毛を外してアイラインを引き直し、透明のマスカラを塗る。目の上で切り揃えた赤い前髪につかないように気にしながら鏡を見る。淡いピンクのチークをほんの少しだけ加えておく。

暗いブラウンのウィッグを被って、真っ赤な髪がはみ出てい

ないかを確認する。ウィッグは昨日のうちから三つ編みにして軽くスプレーをかけておいたから、新たに編む必要はない。少しだけ崩して「いかにも」な演出を加えておく。

何の変哲もない黒縁眼鏡を掛けて、最後に細めの赤いリボンを結べば、時代錯誤なほど真面目な女子高生の完成だ。

鏡に映った自分の姿を見て笑ってしまう。我ながらよく化けたものだ。

空っぽのスクールバッグを持って一人暮らしのアパートを後にする。

『仕事』で得た物は『仕事』に還元が信条、カッターシャツ以外の仕事着は大抵『仕事』で手に入れたものだ。

わたしの住むアパートは夜の仕事をする人ばかりだから、この時間にエレベーターの中で住民に出くわすことは滅多にない。何か言われても怯える素振りを貫き通せばいい。

私はどこからどう見たって「真面目で気弱な女子高校生」。小さな声で控え目に笑って頷けば幾らでも誤魔化せる。

幸い誰とも会わずにアパートから出ることができた。誤魔化せたとしても『仕事』前に余計な心労がかかるのはできれば避けたい。

下校中の中高生とすれ違いながら駅へと向かう。ちようど良い時間だ。

スクールバッグのチャックが空いていることを確認して本屋へ入る。

ここの監視カメラが上手く動作していないのは確認済みだ。最近の監視カメラは鮮明で『仕事』がしにくくなってしまった。

狙うは人気漫画の一卷から最新巻。
古本屋で見た『お売りください』と書かれたチラシの表を思

い出しながら店内を物色。ちょうど平積みされている。いちばん上のものを数冊手に取り鞆に入れた。

「いらっしやいませー！」

バックヤードから出てきた店員に肝を冷やしつつ手に取っていた続きの本の裏表紙を眺める。

一人で『仕事』をするのは気楽ではあるが、こういうときに壁になつてくれる相手がいないのは不便だ。

手に取った漫画は一旦、元の場所に戻し、漫画本の立ち読み用の小冊子をパラパラと捲りつつ周囲の様子を観察する。

店員の数は三人。レジに一人、書籍の点検をするのが二人。それから客。狭い通路の雑誌コーナーで立ち読みする客が四人。単行本コーナーで物色するのが一人、目的なさげにただ店内を徘徊しているのが二人。わたしの近くに居るのはつい先程出てきた店員と、徘徊する客の二人だ。

小冊子を読み終えた頃、店員はレジの応援に呼ばれてわたしの後ろを駆けて行った。この時期には珍しくマスクをして徘徊する客も店員の方をちらりと伺ったが、またゆらゆらと歩きだしたのを見て、続きに手を伸ばす。

今だ。

平積みされている漫画本は、冊数によって段差ができるためどうしても動きが不自然になってしまふ点が厄介だ。一冊一冊鞆の中に入れて行く。素早さ、慎重さ、少しの大胆さ。一つでも欠けると『仕事』の遂行は難しい。

ありがとうございますと言ったという店員の声を、もう一人が繰り返した。ゆらゆら店内を徘徊していた男が店を後にしたらしい。近づいて来た店員と目が合う。脳内に警鐘が鳴り響く。鼓動がスピードを上げて行くのを感じながら冷静を装って興味もない棚の本を見ているふりをする。

この程度、窮地でも何でもない。だけどいつだって緊張する。だからやめられない。

十二冊の重みを肩に乗せながら電車を降りる。

とんでもなく鈍い女だ。心の中であの店員をせせら笑う。ごゆっくりどうぞと事務的に笑いながら、さっさと別のコーナーに移動してしまった。

先の本屋からは二駅離れたチェーン店の古本屋に足を踏み入れる。

身体中に浴びせられる『いらっしやいませ』の声を受けながら、買い取り専用カウンターに向かった。あらかじめ駅でカバーを外して軽く読み癖をつけておいた。

「審査が終わり次第お呼びしますので店内で少々お待ちください」

鞆の中身を全て出して番号札を預かる。全巻そろっている
買い取り金額が上がるのだ。新品を十二冊も出せば確実に訝し
まれるが、若い店員はタイトルと冊数を確認しただけだった。
大した金額にはならなかったものの、あの古本屋にしてはそ
れなりに高値で売れた。ネットオークションという手もあるが、
できるだけ『商品』は早く手放したい。

空になったスクールバッグにダサイ三つ折り財布を放り込ん
だ。

高い建物が多いせいで昼でも薄暗い道はこの時間になると余
計に暗くなる。住民に見つからなければいいのだけど。

「……」

『仕事』後、駅から帰るときにいつも通るこの道は行きの道と
は違い、人通りが極端に少ない。

補導されることや住民とすれ違うことを避けて、軽自動車が

通るのもやっとの狭い通りをわざわざ歩いてい
 自分以外の足音がすることなど滅多にない。滅多にないとは言
 え、今まで一度もなかったわけではない。

今もそうだ。：：誰かの足音。

万引きは、現行犯でなければ逮捕はできない。監視カメラに
 映像が残っていたとしても、顔を見ただけでその人物の名前や
 住所が分かる人間はいない。しかもわたしはさつき『商品』を
 売りに行った。捕まえに来るならその前でなければいけないか
 ら、警察や書店員の線は薄いだろう。

大丈夫だ。そう言い聞かせて、強ばっていた肩の力を抜いた。
 わたしは少し歩みを緩め、後ろの人間が追い越してくれるの
 を待つことにした。

が、足音はなかなか追いつかない。
 背中を嫌な汗が伝った。振り向こうにも身体が竦んでただ歩

くことしかできない。いつも十分もかからない道を倍近くかけて歩いている気がする。

「あの」

男の声だ。恐らく同年代だろう。

意を決してという風に掛かった声は誠実にすら聞こえる。少なくとも、こちらをどうこうするつもりはないのかもしれない、そう思っただけ振り向こうとした刹那だった。

背中にひどい衝撃を受けたのは。

わたしの身体は前に倒れた。

「あっ、あ……」

どうして、という言葉は呻き声にしかならなかった。頭と目玉をなんとか動かして後ろを見る。

木製の白く長い棒。見覚えのあるパンツに、見覚えのあるシヤツ。そしてこの時期には珍しいマスク——本屋を徘徊してい

た、客の一人に違いなかった。

「家……？」

見慣れた天井が目に入る。しかし置いてある家具は自分の借りた部屋のそれではない。ただ木の枠にマットを敷いただけのベッド以外、この部屋には何もなかった。

背中に走る疼痛に思わず顔をしかめて、意識が落ちる前のことを急激に思い出す。

「おはよう。気分はどう？」

あの声だ。痛みも忘れて身体を起こし、できるだけ隅の方へ逃げた。

男はもうマスクをしてはいなかった。蛍光灯に照らされた、さも人畜無害ですと言わんばかりの顔がこちらを向いている。「どういうつもり、ここはどこ？ 貴方は誰、どうしてこんな

ことをするの！」

「うるさいなあ」

男が眉間の皺を寄せた。

そうすると人畜無害だった印象がひどく酷薄なものへと変わる。このアパートって壁が薄いんだね、と男が笑った。口角を上げただけの、歪な笑みだ。

「でも残念ながらここは角部屋で、お隣さんはこの日この時間仕事でいない。よかったね」

「よかつた？」

「うん。だって、誰にも邪魔されないだろう？」

スツと体の奥が冷たくなった。

男は玄関の方へと歩いていく。アパートの他の部屋に入ったことはなかったが、どうやら、間取りはわたしの部屋と変わらないようだった。この隙に、とマットの上に立ち上がるも、痛

みに再び崩れ落ちる。

膝がソフトボールのように腫れ上がっていた。倒れたときに捻挫でも？

戻ってきた男が鼻を鳴らした。男の手にはさっき見た木製の白くて長い棒が握られている。バットだ。

「それ、どうするつもり、なの」

「さあね」

わたしは自分の腫れ上がった膝頭に目を落とした。

「ま、使い道は色々あるけどね。例えば、一、頭を打ってホームラン。二、身体を滅多打ち。三、使わない、とか」

「さ、三……？」

歪な笑みを浮かべる男の眉が吊り上がり、目つきが鋭くなる。気分を悪くしてしまったのだろうか。男の顔に慌てて訂正した。

「ごめんなさい、わたし——」

「選んでいいとは言っていないよ」

何度か殴りつけて、女が動かなくなったのを確認して、腰を下ろす。

制服なんか着ちゃってさ。女のほうが面倒な場合が多いな。最後の最後まで声を上げて、言葉の羅列。うるさくて仕方ない。

『なんでどうしてそんなことするのやめてやめてやめて！』

こういうときに脳裏によぎるのは、あの蔵の中で首を吊ったお姉さん。静かできれいな彼女の影だ。

女のために探した花を落として、窓から降りる。さっさと帰ってパソコンにまとめて忘れてしまおう。

【case4 自殺】

ぐ、と腕を伸ばすと背骨の軋み音が聞こえたような気がした。いつの間にか外は暗くなっていてパソコンの光が僕の手元を照らしていた。目が悪くなるわよ、なんていう母親のあの声が脳裏によぎった。はいはい。そうかもしれないね。

なんて、考えて笑ってしまう。

床には散らばった新聞記事やネットニュースを印刷したもの警察がこのあたりを調べはじめているらしく、僕が起した数々の事件は「連続殺人事件？レインコート男の謎！」なんて馬鹿げた見出しをつけられていた。

僕はただの殺人鬼なんかじゃない。僕は都市伝説だ。どこにだっていて、どこにもいない存在なんだ。

それを「連続殺人事件」だの「快樂殺人鬼」だの安っぽい言

葉で表してくれるな。ただの犯罪なら、ただの殺人事件なら、それはすぐに忘れられてしまう。語られることもない。

僕は、最後の舞台を用意することにした。

都市伝説は語られて継がれていくもの。口裂け女なんか一九七九年に語られ始めて今でも語られている。

存在し続けること。

僕は、僕が最後の舞台に立った後、だれかが『レインコートさん』を受け継いでくれることを願って、今までの経緯や殺人方法、そしてやらなきゃならないこと、やるべきことをまとめた。USBに保存して、白い封筒に入れる。

不意にその封筒がいとおしくなっていて、指先で撫でてみた。

僕が記録を残そうとした理由は、三年前、依頼の中に紛れた一通の手紙だった。

ひたすらに僕に対する敬愛の意が綴られた、手紙。かわいら

しい手紙。

これまでもレインコートさんへの手紙が届いたことは何度かあった。ただこの子の手紙だけは、黒くて赤くてドロドロした僕と同じような感覚を持っているのではないかと、思った。緊張しながら丁寧に自分の狂った部分を隠しながらそれでも僕へ手紙を書いているのがよくわかった。

僕はこの子をレインコートさんの跡継ぎにしようと考えた。きっとこの子は僕を完全にコピーしてくれよう。パソコンからUSBを抜き、すべてのデータを消去する。HDも取り出してネットで調べたとおりに壊し、それから画面を割る。パソコンは普通ゴミでは出せないから業者あてに送る準備をした。

その日はそのまま眠った。
大学内は妙に静かだった。

今日は卒業式だ。

僕は花屋の前で悩んでいた。店員に「恋人に送るかわいい花を探していて」と適当に嘘をついて一緒に選んでもらった。結局、スイートピーにした。淡いピンク色の花。僕には全く似合っていないが、花言葉が気に行った。

この期に及んで女々しいような気もする。

けどいいや。

大学に着いた。

卒業式だから一応、スーツ。

い。
だけど僕は出るつもりはない。僕がいないと騒ぐ友人もいない。

全員が会場へ移動するまで資料室に逃げ込む。

式が始まったころ、僕は屋上の扉を押した。

空は青い。やるべきことはすべてやった。

残っているのは足を前に踏み出すのみ。

僕は死ぬ。

だけどレインコートさんは死なない。これからも語り継がれる。

足を踏み出す。

重力が僕を引っ張る。

地面がぐんぐん近づいてくる。

もうすぐだ、もうすぐ！人を殺してきた僕が、死ぬ瞬間を体験できるんだ！

お姉さん、息絶えるとき、どんな気持ちだったの？死のうと決めたとき、どんな感じがした？ねえ、ぼくにもおしえて。

スイートピーの花言葉は「私を覚えていて」。

【cases5 おしまい】

全身に痛みを感じて目が覚めたのか、それとも、目覚めてから痛み気付いたのか、どちらが先かはわからない。

重い臉を気合で押し上げて、正面のパソコンの暗い画面を見つめる。

そうだ、昨日も遅くまでパソコンと向き合っていたんだ。いつもなら適当なところでベッドに入るのに、知らないうちに机に伏していたみたい。

体の痛みとスリープモードのパソコン、点けっぱなしの蛍光灯がそれを物語っている。もうわたしにあまり関心のない母親でも、電気代云々と小言をいいたくなるような状況だ。

昨夜のわたしはパソコンで何をしていたんだっけ。
スリープモードを解除し、パソコンが立ち上がるのを待つ間

に、すぐ傍の開けっ放しで放置されてるチョコレート菓子の箱に指を突っ込む。だけど空っぽで、残ったくずが指に付いただけだった。それを舌先で舐め取りながら、身を屈めて足元のビニール袋からペットボトルの水とサンドイッチを取り出す。

台所に行けば食べ物なんていくらでもあるけど、家族の誰かと鉢合わせるのが嫌で、自分の部屋に食料を蓄える癖がついてしまった。

立ち上がったパソコンの画面が目に入る。

ああ、なんだ、またこのサイトを見てたのか。

ここは、不思議な出来事を好む人種、いわゆるミステリーオタクが集う場所で、日本各地で起こった不思議な事柄に関する情報の交換や、それに対する推理合戦行われている。

わたしは人様の書き込みを眺めるばかりで、情報を流したことも、意見を述べたこともないので、あまり熱心なミステリー

オタクとは言えないかもしれない。

お気に入りへの掲示板や、ミステリーファンサイトがいくつもあつて、そこを順々に巡ることが唯一の楽しみなのに、最近はそのサイトがあまり更新されず書き込みの数も減る一方だ。新しい情報が書き込まれていることを微かに期待してサイトにアクセスしても、やはり一件の書き込みもなく、落胆することがほとんどで、昨日もそうだった。一番お気に入りへのサイトを開いたけど以前と何も変わりがなくて、やっぱりな、と落胆した。

パソコンを操作し、新しい画面で動画サイトを開く。

イヤフォンを耳に差し、適当な動画を再生してから、サウンドイッチを口に運んだ。膝の上にパンくずがこぼれるのを気に留めずに、目の前の動画に集中する。

五、六件目の動画を見ていた時、突然荒々しく部屋のドアが開けられた。イヤフォンのせいで足音には気付かなかったけど、

相手が誰なのかは嫌でもわかる。

「朝からパソコンなんてつけて何をしてるの？ 学校は？」

イヤフォンの隙間から滑り込んできたのは、ひどく不機嫌で耳障りな声だった。まあこの人が不機嫌なのは今に始まったことじゃない。

片耳だけを自由にし、振り向きもしないで答える。

「今日は昼から」

「そう……ねえ、最近夜遅くまで起きてるみたいだけど、お勉強？ それとも、今みたいにパソコンで遊んでるのかしら。どうなの？」

「別に何しようがわたしの勝手じゃん。お母さんには関係ないでしょ」

後ろを見なくても、背中に刺さる視線が鋭くなったのがわかった。

何かぶつぶつ言いながら、荒々しくドアを閉める。
なんにも聞き取れなかったけど、あれは全部小言に違いない。
いつもならわざわざ話しかけてこないのに、今日はよっぽど虫
の居所が悪かったのか。

こう見えて、昔のわたしは『いい子』だったと思う。

いい子の定義なんて定かではないけど、親の言うことをよく
聞く素直な子をいい子と呼ぶのなら、少しだけ当てはまらない
気もする。

わたしは物心ついた時から母親の言いなりだった。

あの人は典型的な教育ママで、クレヨンの代わりに鉛筆を握
らせ、絵本の代わりにひらがな練習帳を買い与えるような人だ
った。そういうえば、公園で遊ぶ同世代の子供を眺めながら手を
引かれて通った学習塾は、先月潰れてしまったらしい。

寂しさや懐かしさが欠片ほども浮かばなかったのは、思い入れなんてないのだから当然のことだ。

わたしは馬鹿ではなかったから、自分のそれと余所の母親が少し違うことに気付いていたけど、それが嫌だとは思っていない。かっただ。勉強さえ頑張れば褒めてくれるし、言うことを聞いていれば上機嫌だ。ちよつとしたことで怒るのがたまにキズだけど、言動に気を付けておとなしくしていれば問題ない。

ただ、勉強が好きというわけでもなかった。登場人物の気持ちやをふまえて答えを出すことや、80円のリンゴを5個買った時の値段を求めることに何の意味も見出せないし、楽しさなんて皆無だ。

でも、勉強の手を休めればあの人やヒステリーを起こすから、それを避けるためだけに勉強を続けた。そうすれば怒られずに済むし、近所にまでよく聞こえるヒステリックな母親の怒鳴り

声で、我が家の醜態を晒すこともない。

母親に従っていたのは面倒な目に遭いたくなかったからで、そこに素直な心はみじんもなく、いい子だったというよりも、いい子のフリをしていたという表現の方が適切だ。

あの人の判断には全て従っていたけど、それが全て正しいとは思っていなかった。塾は嫌じゃなかったけど、週六日は多いと思っていたし、外見にもいい子であることを求められて髪形を毎日おさげにすることを強いられた上に、地味な色の服とハイソックスしか買い与えてもらえなくてうんざりしていた。

当然わたしはお受験組で、あの人が決めた中学校を言われるがまま受験し、合格した。

そこに私の意思はない。中学なんてどこでも良かったし、小学校で離れたくないと思うような友達が出来なかった。どうせこれからも勉強一択で友達なんて出来やしないだろう。

中学生になって環境が変わっても、わたしのやることは変わらない。

母親はすでに私が受験する高校の選定を始めていて、知らないうちに中学の最寄りから三つ目の駅にある進学塾へ通うことになっていった。

唯一嬉しかったことといえば、制服のおかげで母親が用意する地味な服を着なくて済むことだ。相変わらずおさげは健在だったけど。

家と学校と塾を行き来するだけで、ろくに他人と関わらない日々の中、わたしはよく空想に耽るようになった。

例えば、『ある日急に魔法が使えるようになったら何をする？』だとか、『突然現れた白馬の王子様からプロポーズされたらどうする？』という万に一つも起りえない、考えるのさえ馬鹿らしい内容だ。

今思い返すと恥しいものばかりだけど、中学生なんて誰もが夢見がちな傾向にあるのだから仕方がない。

あらゆるパターンの『もし』を想像していると、まるで自分じゃない誰かになれた気がして、不毛なことだと理解していても空想は止まらなかった。勉強が難しくなるにつれてそれに費やす時間は多くなり、受験が目と鼻の先に迫った中学三年の一月、わたしはある一つの『もし』に辿り着く。

『もし、お母さんの言いなりになっていなかったら、今頃どんな日々を過ごしていたんだろう』

可愛らしい服を着て、毎朝鏡の前でその日の髪形に悩んで、放課後には友達と寄り道しておしゃべり――。

他の子がしていることは、わたしには無縁だと思っていたのに、今まで興味のなかった事柄が、途端になんだか尊いもののように思えてきた。同時に、母親にその尊いものの全てを奪わ

れた気がした。それらに魅力を感じる反面、急激に勉強への意欲は薄れていった。

違う、元から意欲なんてなかったんだ。わたしは言われたことを言われた通りにこなしていただけ。その間、色々なものをあの人が奪っていったとは知らずに。

その日からわたしは勉強することを放棄した。

それどころじゃない、奪われたものを取り戻すには何をすればいい？

オシヤレを始めようにもお小遣いのほとんどは参考書に消えたし、中三の三学期からの友達作りは明らかに無謀だ。勉強とは違って明確な答えが出ないことに焦りを感じていた。今思えば、ずっと昔から周りの子達に憧れていたのかもしれない。

高校に入学してこれまでと全く違う日々を手に入れるしかない。そう答えを出すまで三日もかかった。

そのためには母親の選んだ高校への入学はなんとしてでも避けないといけないのに、決定事項に逆らう気が起きない。あの人の壮絶で見苦しいヒステリーはもう見たくなかった。それに、三日前から母親に対する十五年分の反抗心や嫌悪感が湧き上がり、顔も見たくないし口もききたくない。

遅れてやってきた反抗期が無性にわたしを苛立たせていた。

どうすれば母親に従わなくて済むんだろう。あの人の性格が良い方向に変わることには願うだけ無駄だ。病気で寝込みでもすればおとなしくなるかな。なるべく、治療法の説明されていない不治の病がベストで、長期入院してくれても構わない。少しだけでもいい、可能な限り長く、母親を自分の視界に入れないでおきたい。お父さんと喧嘩して実家に帰ってくれてもいい。嫌いな人間を目の前から排除する一つの方法として、『レインコートさん』という存在にネットで出会った。

『ある大学の研究棟のどこかの教室に、殺してほしい人間の名前と特徴、理由などを書いたお願いの手紙を置けば実際に殺してくれる』という噂のような、都市伝説のような何かだ。

大学名は伏せられているがほぼ特定されていて、実際にその大学内で何人か死んだらしく、現場では黄色いレインコートの不審者が目撃されている。

死体の傍に置かれた花は、死者への弔いなんだろうか。店で花を吟味する殺人鬼なんて想像できない。

母親を殺してほしいとまでは思わないけど、純粹に彼に興味があった。

他人が恨んでいるというだけで自分とは無関係の、そのまた他人を殺すことにいったいどんな意味があるんだろう。

四六時中『レインコートさん』のことが頭から離れない。気になることはすぐに調べないと落ち着かない性分で、彼の

起こした事件に関する情報を集めた。ネットでもニュースとして取り上げられていたが、わたしが彼を知るきっかけとなったミステリーファンが運営しているサイトに設けられた掲示板では、もっと多くの濃い情報を得ることが出来た。

書き込みを遡れば、実際に殺人鬼を目撃したという者や、彼への依頼がまだ達成されていないと不満を漏らす者、『レインコートさん』はこの世に存在すべきではない人間を始末するため、にやっつて来た異界の使者だ、という独自の持論を展開させる者など、あらゆる人間が集まっていて、どの書き込みも真偽は不確かなのに、不確定要素ばかりで構成された彼を知らば知るほど、高揚感が湧き上がった。

塾に行くフリをして『レインコートさん』が初めて目撃された大学に行ったこともある。

あらかじめ、手紙のようなものを二通書いてきた。

片方の内容はもちろん母親のことだけど、依頼として提出するつもりはない。ただ、国語の文章問題のように文字数や句読点、文章の構成を気にも留めずに、感情のまま文字を並べるのは気持ちよかった。書き上げた時にはそれは、依頼というよりも悪口を書き連ねただけのものになった。

もう一通は依頼ではなく『レインコートさん』宛の手紙だ。人を殺す目的や、花の意味についてなど聞きたいことは山ほどあるのに、それを上手く文章に出来ないことが歯がゆかった。その代り、彼に対する思いの丈をぶちまけた。『レインコートさん』を知ったきっかけや、これまでの殺人事件に関して思うこと、あなたのことを知りたくて情報収集に力を入れていること、本当のあなたに会ってみたいと思ってること、それから、それから――。

自分が見ず知らずの人間から急に熱烈なファンレターをもら

ったらどう感じるかを後々考えて寒気がしたけど、夢中で書いてる間はそんなことには気付かなかった。便箋の枚数を数え始めて、それが十枚を超えた辺りでカウントをやめた。彼にとっては迷惑でしかないだろうが、わたしは「超大作ができた！」と馬鹿みたいに喜んだ。

少し迷った挙句、文末にひかえめな小さな字で自分の住所と名前を書いた。返事が欲しいわけじゃない。ちよつとだけでも、わたしのことを知って欲しかったただけだ。

大学生の春休みは、ずいぶん長い期間あるらしい。その日は学内が閑散としていて、中学の制服姿のわたしは浮いていた。警備員の怪しげな視線をかい潜って、依頼置き場とされる西棟の資料室を目指す。

教室に関する情報の源はもちろんネットで調べてあった。信ぴょう性はないけれど、彼とどうにか繋がるためには不確かな

情報にでも縋るしかない。

迷い一つも目的の部屋を発見した。鍵はかかっておらず、「不
用心だなあ」と言葉がこぼれる。まあ今回はその不用心に救
われたわけだが。

入って左側の棚の上では、折りたたまれた紙切れが大きな山
を作っていた。きっと全部彼への依頼に違いない。

表には出さなくても、心の中で誰かを憎んでいる人間なんて
いくらでもいるだろうし、驚きはしなかった。

その山の隣に、書いてきた二通のうちの一通を置いた。もち
ろんファンレターの方だ。もう片方の依頼は、やはり置いて帰
る気にならなかつた。封筒の山を背に、踵を返す。

彼が立ち寄るであろう場所に立ったことで、すっかり彼に近
づけた気になった。全くそんなことはないのに。

高校受験に失敗するつもりだったわたしは、解答欄を全て白

紙にすることで念願の不合格を勝ち取った。

合格発表当日の母親は、わたしが知る中で最大のヒステリーを起こした。細い体のどこから出るのかわからない大声でわたしの不合格を責めたて、わたしを『いい子』にするため自分がどれほど努力したかを一気に捲し立てたせいで、近所に我が家の事情が筒抜けになった。

今後の輝かしき高校生活をどう送るかに思いを馳せていれば、そんな説教なんて痛くも痒くもない。母親が怒鳴れば怒鳴るほど愉快的な気持ちになったけど、喜んでいる場合ではない。どうしても言わなければならぬことがある。

罵倒の連続で母親が息を切らした隙に割り込んだ。

「お母さん、どうしてひどいことばかり言うの……」

なるべく棒読みにならないように、出来るだけ声を震わせて。今だけ気分は大女優。

「わたし、もう勉強なんてしないから！」

反論される前に自室に飛び込んで鍵を掛ける。後々の無駄な衝突を避けるため、もうわたしに勉強する気が微塵もないことは早目に伝えておきたかった。唐突に切り出すよりも、努力を母親に認めてもらえず感情が爆発したような演出が必要だと思っ

た。十五年間もあの人の娘をやっていたんだ、出来の悪いわたしを全否定することなんてあらかじめわかっている。だから、それをありがたく利用させてもらった。

今はもう勉強どころじゃない。友達作り、それから、オシヤレを始めるためにアルバイトもしなきゃ。大きな目標も出来たから、貯金もしないと。

わたしは、『レインコートさん』に近付きたい。

彼と同じ存在になりたいのか、彼の正体を突き止めたいのか、

それともただ彼に会いたいのか。どれに当てはまるのかはわからない。全部に当てはまるのかもしれないけど、どれも違うのかもかもしれない。願望の達成に繋がるかどうかなんてわからないのに、わたしは彼が存在する大学に行きたいと思った。

『レインコートさん』がただの人間ならあの大学の関係者である可能性は高い。仮に学生だとしても、わたしが入学する頃には向こうは卒業してしまってるだろうし、大学と無関係であれば無駄足に終わる。

でもわたしはあの大学に行きたい。彼が過ごした場所で自分も過ごせるなら、それだけで満足だ。

念願の高校生活は思い描いていた通りにはいかなかったけど、それなりに楽しめた。友達もできたし、アルバイトが辛くても給料でオシヤレを嗜むことで気を晴らした。お金を貯めることを最優先事項としていたため、放課後は友達と寄り道するより

も働いている方が多かったです。

同じ趣味嗜好を持っている子と親しくなりたかったのに、アイドルファンやアニメオタクはいても、『不思議なもの』が好きだという子は一人も見当たらなかった。わたしが『レインコートさん』について熱く語りでもしたら、みんなどんな反応をするだろう。高校生にもなってよくわからないものにうつつを抜かしているだなんて、卒業までずっとお笑い種だ。

だからわたしはイマドキの子を演じる。いい子のフリをしていたあの頃と同じで造作もないことだった。

『レインコートさん』以外の不思議な存在についてもっと知りたくって、わたしはよりいっそうネットの世界にのめり込んだ。

ミステリーオタクが集うサイトを覗けばいくらでも新しい情報が得られる。真偽が不確かでも構わない。不確定要素が多ければ多いほど考察のしがいがあるし、もっとももっと情報が欲し

くなる。

夕方からアルバイト、深夜はネットサーフィン、昼間は学校で眠るのが高校三年間のライフサイクルだった。

先生の話聞いていなくても教科書を読めばすぐになんでも理解出来る。真面目に授業を受けている子よりも自分の成績の方が良かった時は少しだけいい気分だ。彼がいるとされる大学のレベルは真ん中よりも少し下、前回とは大違いで受験するに当たって何の苦労もなく、先週無事に入学式を済ませた。

時が過ぎるにつれて『レインコートさん』に対する世間の興味は徐々に薄くなっていった。ただの連続殺人や、頭のおかしい快樂殺人鬼の仕業だ、という言葉だけで片付けられることが多い、この場所で殺人事件が起こったことはほとんど忘れられた。先月、卒業式が行われた日に卒業生の遺体が見つかったらしく、世間の興味は一瞬そちらへ移った。

屋上からの飛び降り自殺として処理されたが、遺体が胸に花を抱いていたことから『レインコートさん』と関わりのある事件だと一部のミステリーファンが騒いでいる。馬鹿な生徒がレインコートさんの噂に便乗し、目立ちたがって自殺したなんていう人もいる。どちらにせよ、わたしがあればこれ考えたところで真相なんて掴めないのだから、無駄なことはいらないでおこう。

おっと、もう家を出る時間だ、過去に思いを馳せるのはここまでにしよう。

母親と鉢合わせるのを避けたくて足音を殺して玄関に向かう。何の気なしに手を突っ込んだポストは、父親宛の郵便物が大半で、そこに紛れていた宗教勧誘のチラシを舌打ち交じりに破り捨てた。

チラシの下から、見慣れた文字の並びが見えてわずかに動揺

した。わたしの名前だった。白い封筒に刻まれている右肩上がりの字に見覚えはないし、相手に心当たりもない。手紙のようだけど手触りに違和感を覚えて、首をかしげながら開封する。中にはどこでも売られてそうなUSBが入っていた。

誰が何のために送ってきたんだろう？

この瞬間にわたしの脳内は真っ白になり、壁や階段に体のあちこちをぶつけても構うことなく自室へ駆け込んだ。パソコンが立ち上がる時の機械音に交じって聞こえる心臓の鼓動がやけに煩い。

脳裏に浮かんだ小さな可能性を打ち消すように大きく頭を横に振る。期待しちやいけない、でも、これは、もしかしたら――

煩かったはずの心臓の鼓動が途端に聞こえなくなった。
そこに、送り主の名はない。でも、それが誰なのかはすぐに
わかった。

わたしが愛して近付きたくてたまらなかつた彼が、データと
して目の前にいる。

三年前、自分の存在をさりげなく主張したくて書いた文末の
名前と住所。あの手紙に彼は返事をくれたんだ。

内容を思い出して赤面する。恥しさと急激な気分の高揚で、
なんだかめまいがしてきた。

淡々とつづられる彼の軌跡の最後に添えられた『都市伝説か
ら生まれた僕は、都市伝説の一部となって消える』という一文
の意味を理解出来ない程わたしは馬鹿じゃない。

ああ、せめて今日だけでも馬鹿でいられたらよかつたのに。
何も語られていなくても、自分の成すべきことはもうわかっ

た。わたしは『レインコートさん』にならなければ。
彼に会うことはもう叶わないかもしれない。でも、会えなく
たって、私の敬愛する彼は、ここにいます。

聞こえていますか。貴方は永遠に語り継がれ、そうやってず
っとずっと、人々の記憶の中で生き続けるのです。任せて下さ
い。わたしが、あなたになります。

追想曲



「……全然駄目だ」

誰もいない教室で、そう吐き捨てながら音を奏でていた両手を鍵盤から離した。

奏でていた……というより、音の出るスイッチを押していたと言ったほうがいいかもしれない。そう、奏でてなんかいないんだ。

「こんなの、演奏じゃないだろ……」

もう一度、弾こうと試みる。けれど、指が思うように動かない。楽譜に描かれているような音は出せても、この両手からは流れるような旋律が出せない。

楽譜が読めても、これじゃあ意味がない。

今日も駄目だ。もう帰ろう。あきらめて、白い楽譜へと手を伸ばした。

その時。

「湊みなと！」

いきなり開かれた扉の音と、俺の名前を呼ぶ声に驚き、片付けようとしていた楽譜を床にばらまいてしまった。

——っ湊！

俺の……名前を叫ぶ声……。

俺は散乱する白い楽譜を見ることができなかつた。別に名前が聞こえなかつたわけじゃない。あの時と同じ様に間違いを起こしてしまいそうで楽譜から目を背けることができなかった。俺の名前を呼ぶ声が近付いてくる。その声が俺の頭を満たしていく。

やめろ……来るな……来るなっ！！

——湊！

「やめろっ！！」

肩に置かれた手を思わず払い除けてしまった。

「いってえ」

視線を声の主へと移す。

「…翔かけるか」

「なんだよ。そんなに驚くことないだろ？」

翔以外、そこには誰も立っていない。

「お前が勝手に入ってきて、勝手に声をかけたのが悪い」

「何それ俺が全部悪いみたいな言い方」

「実際、悪いだろ。練習中に勝手に入ってきたし」

「だって、ピアノの音が聞こえてこなかったからさ、休憩して

るんだと思ったんだよ」

お前以外にこの教室使う奴いないんだし…と、ぶつぶつ言

いながら俺が先ほどばらまいてしまった楽譜を翔は拾い始めた。

やっぱり悪いと思ったから拾ってるな、こいつ。

「お前も見えてないで拾えよ」

「……翔のせいであんなったけどな」

「へーへー、すみませんでした」

「分かればそれでいい」

お互いにそんな言い合いをしながら、床に散らばった楽譜を拾い集める。俺はそれをファイルに入れ、鞆に手をかけた。

「あれ、もう終わりなのか？　せっかくオケ部いないのに。今日は珍しく早いな」

背中を向け、鞆に手をかけている俺の様子を見て、翔が声をかけてきた。

「そういうお前のほうこそ、早くないか？」

「質問に質問で返してくるか」

さすが湊だなあと、よく分からないが感心した様子の翔は笑っていた。

「いや、今日はナシ。俺はさ、なんとなく第二音楽室のほうに

行ったら珍しくお前の音が聞こえないからさ。この教室お前しか使ってないし、放課後のこの時間っていつもお前が音出してるじゃん？ お前も休憩くらいするんだなと思って。だったらお前の休憩がてら、腹心の友である俺が話し相手になってやろうかと思っ

「帰れ」

翔の最後の発言を言い切る前に俺はピリオドを打った。

明らかに残念そうな顔をした翔。親友だからこそはつきりと言ったんだが。翔も俺のことを他の奴とは違う、唯一の親友だと言っていた。

「帰るぞ。閉めるから早く出ろ」

「お、おう！ 帰るか！」

さっきまで残念そうだった顔はどこへいったのか、いつもの明るい翔の顔に戻った。

ごめんな、翔。親友相手でも俺、こんな態度で。でも、ほんとは感謝してるんだ、話しかけてくる奴、翔しかいないから――。

「ねー、この譜面どんなリズムだっけ？」

次の日の放課後、第二音楽室へ行こうとすると、第一音楽室の方から生徒の話し声が聞こえてきた。

「そこはあれだろ？ 飛ぶように！ だよ」

「あー！ そっかさっかさ！ タンタンツ！ て感じだ！」

：：タンタンってなんだ、スタッカートだろ。そこはもつと一音を短く切って演奏するべきだ。一番盛り上がっているシーンだし、メロディー担当ならもう少し力のある音が必要じゃないのか。

今度は、金管楽器の音が響き渡る。周りも様々な音を奏で始

めた。

「こんな感じだね！！」

「お！ 良い感じじゃん！」

どこがだ。全然良くないだろ。ちゃんと楽譜見てるのか。

早く第一音楽室の前を抜けようと早足になった瞬間。

「佐藤先生の分まで頑張らないといけないからね！」

誰かの言葉に、俺の足は止まってしまった。

：：佐藤先生の分まで、か。

「そうそう、佐藤先生をびつくりさせてやろうよ」

さつきまで様々な音が流れていたが、今はその音は止まり、

生徒たちの盛り上がる声に変わっていった。

佐藤先生：：この学校の音楽教師でオーケストラ部の顧問だ。

そして、俺の唯一の理解者で信頼できる人だ。

「でもさ、佐藤先生も気の毒だよね」

いつの間にか、盛り上がっていた声は少し低めのトーンへと変わっていった。

「ほんとにな。佐藤先生らしいっちゃ、らしいんだけど」

「でも、あれは先生のせいというよりさ」

：：俺はまだ動けずに話を聞き続けた。

「そーだよ。佐藤先生、人が良すぎるんだよ。個人の意見を

尊重するのは分かるけど、オケ部は団結力が大切なんだからさ」

「あいつ一人の言う事に、私たちが何で合わせなきゃいけない

んだろ。何様なんだよ！ って感じだよ」

「今思えば辞めてもらって正解だよ」

「それに、あいつが最初からいなかったら佐藤先生もあんなことにはならなかつたのにね」

突然目の前の扉が開き、先ほどの声の主が現れた。

俺以上に相手は動揺した様子だ。さっきまでの威勢のいい声

がしぼんでいく。

「……ひ、久しぶり」

「……先輩、俺のことより、もっと練習したらどうですか」

相変わらず下手くそだし……。思わず本音がこぼれた。

「……っ、湊！ お前のせいで佐藤先生は弾けなくなったんじゃないか！！」

やめろ！

そんなの、俺が一番知ってることだ。

ピアノの鍵を強く握り、静まり返った廊下の中で俺は振り返らず歩き続けた――。

第二音楽室。今日は金曜日だから長く使うことができるのに、いつもの調子に戻るところか、最悪の気分だ。

「えっ」

扉に手をかけると、誰もいないはずの教室の中からピアノの音が聞こえてきた。しかも、どこか聞いたことのあるような旋律だ。

どういうことだ。オーケストラ部は第一音楽室を利用しているから俺以外、この教室は誰も使わないはずだ。ポケットにある鍵を確かめる。この鍵が俺の手にある以上、この教室から音が聞こえてくるのはおかしい。

開けたと同時に音が鳴り止んだ。

ピアノの方へ視線を移すとそこには一人の女子生徒が立っていた。教室の明かりは点けてなく、窓からの夕日が差し込んでいた。ただけなので、俺の方からはっきりと女子生徒の顔が見えない。

だが、長い髪が夕日に照らされていて、とても綺麗に輝いて見えた。

しばらく、女の子に視線を向けたまま俺は沈黙していた。ピアノは鍵がかけられておらず、いつでも弾ける状態になっていた。

「あんだ、なんでピアノ弾いてるんだよ？」

俺は女子生徒にピアノの鍵を見せながら問いかけた。鍵は夕日の光を反射しながら輝きを持っていた。

「……鍵？」

ゆっくりと近づいてきた女子生徒はそう呟きながら俺の方へと歩み始めた。夕日に照らされて、輝いていたように見えた長い髪は、とても深い黒髪だった。

「……あつ、鍵が開いていたから。ちよつと弾きたくなつて」

顔の表情がはつきりとわかる距離にまで近づいてきた女子生徒は、少し驚いた表情を見せた後、微笑みながらそう答えた。

それはおかしい。ここは授業で使われない教室だ。この教室

自体、認知している人も少ない。わざわざこの教室へ弾きに来る奴なんて、俺は今までに見たことがなかった。

ピアノを弾いていたこいつは、一体誰なんだ。

「あんた、誰？ オーケストラ部の新入部員ならここじゃなくて第一音楽室だけだ」

「私はオーケストラ部じゃないよ」

俺の問いかけに何の迷いもなく、こいつは答えた。だったら余計に分からない。なんでこんなところにいる必要があるんだ。

「悪いけど、俺今からここ使うから。出て行ってくんない」

とにかく俺は練習をしないといけな。ピアノの方へ歩み寄り、鞆から楽譜の入ったファイルを取り出す。早くいつもの感覚を取り戻さないと。もっと練習しないと……そう思いながら鍵盤へと手をかける。俺が練習を始めれば、こいつも勝手に帰るだろう。

「あの……私ここで聴いてちやダメかな」

……は？

「私、美音って言います。邪魔はしないから、ここで君の演奏を聴いてちやダメかな」

どういうつもりだ。初対面の俺に何でそんなことを言えるんだ。

「毎週金曜のこの時間だけでいいから」

お願い、湊くん……。名乗った覚えのない俺の名前を呼んだ彼女は、オレンジ色が拡がる教室の中で、とても真剣な表情をしていた。

* * *

こいつと問答をしても時間の無駄だ。そう感じた。どう

せすぐに飽きて出て行くに違いないのだから無視をする。

まずは運指、次に指慣らしの簡単な曲。そして、ずっと練習を続けているコンクールの課題曲。思い通りの音は出ても、音楽としての完成には程遠いうすっぺらいもので。それでも淡々と、がむしやりに指を鍵盤の上に滑らせた。

どれくらい時間が経っただろうか。結局求めている音律はつかめないまま俺は楽譜と向き合うことをやめた。

窓からの光は橙色が陰って、もうすぐ夜になろうとしているのが分かる。

「今日はもう終わり？」

忘れていた。今は一人じやなかったんだ。

「まだ居たのか」

呆れた声でそちらを一瞥する。

「ピアノ、好きなんだね」

「……それが何」

ふふ、と答えず笑う声に、最近の俺ならば苛立ちを覚えるはずなのに、どうしてか声を荒げる気にはならず、目を背けた。

女だから、だろうか。そういう訳でもないはずだ。オーケストラ部の人間に同じようなことをされれば、すぐにでも追い出していたはず。

焦点の合わない考えを断ち切るように、チャイムが鳴る。

「また来週、この時間にここに来るから」

そいつは静かに宣言し、ピアノと俺を見下ろすようにして、窓際で微笑んでいた。

——夏休みのある日。

まだスランプになって間もない頃。見舞いに花を買おうと思つた。

通りかかった道に花屋があったから。さまざまな花を眺めるうちに一つの色が目に留まる。夕陽のような薔薇の花。店の外に出ると、澄んだ青い空と信号待ちの車のブレーキ音、エンジン音が俺の全てを埋める。

そして一瞬、ここがどこだか分からなくなつて、気付いた時には選んだ覚えもない可愛らしい花束を持った状態で目的地に着いていた。

白衣の人間が通りかかり、言葉を掛けてくる。俺は淡い色のそれをテーブルに置くと、看護師に会釈をして誰もいない病室から立ち去った。

その次の週末。

いつもの廊下を通過して、いつものようにばらばらな音を出すオーケストラ部の前を足早に通り過ぎていく。そして第二音楽

室の鍵を手にし、馴染んだ扉を開けると……。

「こんにちは、湊くん！」

長く黒い髪の女子生徒が、こちらを振り返った。その周りで、オレンジ色の光と影がカーテンと一緒に揺らめいている。

「……」

「美音だよ。一週間で忘れちゃった？」

忘れてなどいない。女子生徒、美音はあの日、俺の演奏とは程遠く音を追いかけるだけのピアノをただ黙って聞いていたんだ。そのことについてどう思うわけでも、ないが。

「なんでまた来たんだ」

「毎週ここに来るって言ったよ」

逆光で見えなかった表情を見ると、おずおずと控えめな笑みを浮かべていた。

「湊くん、今日もピアノ弾くんでしょう」

追い返そうと開いた口は何も言えないまままで止まった。目の前にいるこいつは、悪い奴じゃない。ずっと一人で続けていたことを誰かと共有するのは不愉快である、と思っていたはずなのに。

「湊くん？」

余計なことを考えるな。音が旋律に変わることを祈りながら、探せばいいだけ。オーケストラ部の奴らが、俺の今の状態を知ったらどう反応するだろうか。

：：いや、そんなことに意味なんてなかった。それよりも、大事なものは。

「ねえ」

演奏の手を止めた一瞬に、美音が楽譜を指差した。それは確か、先ほど一瞬詰まってミスをした箇所だった。

「何のつもりだ？」

「ここ、そのまま弾くんじゃなくてペダル踏みなおした方がい
いと思う」

指図を受けて少し面白くなく思いつつも楽譜を見ると、書き
込みに埋もれてはいたが確かにそこで踏み替えるという指示が
あった。いつもは見えないからといって忘れてたりしないが、さ
つきは確かに間違えていた。おそらく、それで違和感があった
のだろう。

「そうだな」

こいつはずっと窓辺に居て、楽譜をちゃんとは見えていないは
ずだ。しかし、それが分かるということとは……。

「あんた、この曲弾いたことあるの」

バイオリンを少しね、と笑うのを見て、ふと思いついたこと
があった。

「……他は？　なんか気になるところあるなら言ってよ」

ほんの気まぐれで尋ねてみると、美音は首をかしげた。

「嫌がらないんだ？」

「不愉快ではあるけどな」

あのね、と少し言いづらそうにしている美音。

「どこが、って訳じゃないんだけど」

そう前置きしてから、意を決したように口を開いた。

「湊くんって、なんとなく……辛そうにピアノを弾いてるよね」

美音は、ふと戯れのような手つきでピアノをつま弾く。

聞いたことのある曲。主旋律をゆっくりとなぞるだけの音の

連なり。

けれどそれは何故か、俺の弾くそれよりも「音楽」であるように感じて、無性に苛立った。同時に、その音が欲しくなった。

「ピアノ、好き？」

最初に会った日にも聞いたようなその台詞は、相変わらず柔

「らしく響いてくる。」

「好きだからやってるんだよ」

美音の問いに素直に答えてしまった。

紫が混じり始めた夕暮れの音楽室で、俺は一人ピアノを弾いている。ひたすら音を追いかけるように。美音に指摘された部分を書きとめたメモが増え、より雑然としたように見える楽譜。しかし、俺にとってそれらは道しるべだった。

「まだ、駄目だな」

溜息を吐き、詰まりやすい数小節を繰り返して弾き続ける。

「……俺に、どうしろって言うんだよ」

鍵盤の上にあった手は無意識にポケットへと行き、俺は、先
生から借りたピアノの鍵を握りしめていた。

遠くで、時刻を知らせるベルが鳴る。

誰もが知っている、聞けば夕焼けと秋を連想する歌。そういえば、美音が弾いていた曲はなんという名前だったろう。

思い出そうと、記憶の中の音符をそのまま再現する。そこから俺は、曲名も作者も記憶にないがどこか懐かしい音楽を、思いつくままに弾き続けていた。

「今日はなんか、いつものやつとは違うんだな」

がらり。と開いた扉の音と同時にそんな声がした。

「翔。お前でも曲の区別がつくのか」

「流石にな。さっきの曲はどっかで聞いたことあるぜ。なあ、俺さつき部活終わったんだけどさー、一緒に帰らねえ？」

もうそんな時間か、と時計を見るとまだ少し早い時間だったが、待たせてまでこいつにピアノを聴かせる気分でもなかったから、全てを片付けて帰る準備を始める。

「今日さあ、サッカー部の副部長が……」

基本的に、喋るのは翔だ。スポーツバッグをカゴに突っ込み、自転車を押して歩く。俺はその隣を歩いていて、相槌を打ったり適当に突っ込んだりして。

「湊はどうだったんだ？」

なんだかんだ、こいつに構われるのは口で言うほどに嫌いではない。俺から距離を置かずに話をしてくれるような奴も、珍しいし。

「……何がだよ」

「そっちは最近、なんか変わったことあったか？　ほら、例えば友達が出来たとか」

「出来たな」

絶句する気配。

「え？　……マジ？　何者？」

好奇心丸出しじゃね？　そんなに俺に友達ができるのが面白いのかよ？

翔の驚く声とともに、強く鳴ったブレーキ音に鈍い頭痛を感じながらも答える。

「：：女子つつつたら、もっと驚くか？」

数回会っただけの相手を友達と言っていていいものか悩まないこともない。

「女！　マジかよ！」

「どこのクラスの奴かも分からないけど、俺の演奏をずっと聞いててさ。アドバイスカしてくれるんだよ」

「俺にも会わせろよ！　どんな子？　美人？」

「長い黒髪」

「：：それだけ？　貞子じゃねえだろな？」

「他に何て言えばいいか分からない」

顔を思い出そうとしても、ぼんやりとした霧がかかっているように。思い出せるのは窓際で夕焼けの光に照らされる美音の姿。

思い浮かべて、分かる範囲の特徴を述べていると、唐突に翔が吹き出した。

「ははっ、湊がそんなに気に入ってるなら、どこの子なのか探してやるよ。お前にそこまで言わせる奴、珍しくて俺も見えてみたいし」

俺の交友関係、舐めるなよ？ と得意げにしている。

「別に探さなくていい」

「んなこと言つて、その子のこと結構気になってるだろ？」

にやにやしながら小突かれ、薄暗がりの中を帰る。結局翔も美音に興味があるらしく、別れる頃には既に話が決まっていた。

金曜日、足早に第二音楽室へ向かうと、耳慣れたピアノの音が漏れ聞こえてくる。

先週も聞いたあの曲。

自分が弾く音とどこがどう違うのかは分からない。技術の部分なら自分の方がずっと優れているはずだ。しかしもっと重要な何かがそこにはある。

扉をそつと開けると、想像していた通り美音の姿があった。逆光に照らされて、表情は見えない。けれど、きつと笑っているんだろう。

近づいて声を掛けようとした瞬間、心を読んだかのように美音がこちらを振り返る。

「湊くんの事を考えながら弾いてたから、楽しかったよ」

なにを言ってるんだこいつは、と戸惑った。しかし美音の表情が本当に嘘偽りなく楽しそうだったから、生返事をして放つ

ておくことにした。

「今日もあの曲？」

「もう、コンクールが近いからな」

全国音楽コンクール。

既にエントリ―はしてあって、ずっと練習を重ねている。だが、去年までのように上手くない。指は動くのに、思う音が出なくなってしまった。

「ちよつと、息抜きに他の曲弾いてみない？」

手慣らしの曲じゃなくて、楽しい曲。

そう続けた美音は、俺の答えを聞くより先に音楽室の隅に歩いていく。

その先にあるのは本棚。音楽家の歴史や、楽譜、教科書などが置かれている。

そこから美音が取ってきたのは、去年俺が使っていた、今は

一学年下の後輩が使っているはずの教科書。

「この曲とか」

示されたそれは、合唱でよく使われる曲。以前、合唱コンクールの為にと練習した記憶がある。その練習の時は一人ではなく、先生がいてくれたんだっただか。

「その事しか見えなくなるのはよくないよ。木を見て森を見ずってね」

美音は教科書を目の前に立てると、俺を促した。

「弾けばいいのか」

嘆息しながら楽譜台にそれを置くが楽譜を見るまでもなく、おおよそは覚えてる。そう、あの頃は義務感とかやらなくちやなんて、そんな考えで弾いていなかったんだ。

自分の音に混じって、美音が歌詞を口ずさんでいるのが聞こえた。ここ数カ月ずっと弾き続けていたものとは違う曲と、ど

こか懐かしさを覚える歌声を反芻しながら一曲を弾き終えた。

「……えへへ、ちよつと楽しかった？」

「別に。これで満足したなら練習に戻るよ」

その後もぼつぼつと口を出されながら、今日の放課後は今までになく有意義な時を進めていた。空中に放り出されていた音の連なりが、少しずつ音楽へと編みなおされていくような気がしていた。

そんな、週に一度の戯れを何度繰り返しただろうか。

俺のスランプは少しずつ、ほんの少しずつだが回復し始めていた。ただの音の集まりではない、俺の望む通りの旋律がもうすぐ掴めそうで、今までより練習に熱が入る。

でも、どうしてだろうか。近頃の内心の張りきりとは別に、体はしよつちゆう気だるさを訴えている。

「……まだ帰る時間じゃないな」

纏わりつく頭痛を振り払い、鍵盤の上に指を置く。ピアノを弾いている間だけは、体が楽になるように思った。ただ頭の中に流れていくものを指先から奏でる。その単純だが繊細な作業にひたすら没頭する。

ふと聞こえたのは、チャイムの音。それが鳴り終わってしばらくして、やっと最終下校時刻なのだ。と判断した頭は、ふらふらとピアノから離れる。ファイルの中に楽譜をしまつて、鞆を持ち上げて。それだけの作業がひどく億劫に思えた。

がらり。

扉をあけると、人のいない暗い廊下。いや、走ってくる足音が聞こえる、ような。

「やっぱりお前今日も残ってたんだな。俺も今部活終わったからさ、一緒に帰ろうぜ……っておい、湊、どうしたんだ？ 大

丈夫かよ！ 湊！？」
うるさい、頭に響く。そう答えようとした声は俺の耳にすら届かなくて、やがてうるさかった翔の声も視界と同じように暗い闇へと消えていった。

* * *

甲高い悲鳴とブレーキ音。

幾度もリピートされ続けるそれは、音だけなんて甘いものは済ませてくれない。それだけで済んでくれたら、と願うことさえも無駄に感じるくらい繰り返される。目を背けたいと思うが許されるはずもなく、ただ受け入れるしかない。

俺が自分を抑えられていたら、ただ感情で左右されるような子どもではなかったら、オーケストラ部に行かなかったら起き

なかったであろう事故は、俺の罪の記憶だ。

あの日。普段と同じように第一音楽室で練習をしていた俺は、演奏会が近かったこともあり、かなり苛ついていたら、代が変わってから初めての演奏会だというのに、全体のやる気が空回りしているのか、初歩的などころでつまずく。

ほら、また。

何度目かのミスに舌打ちを鳴らすと、隣のヤツが絡んできた。

「お前何イライラしてんの。誰にだってミスの一つや二つあるだろ」

「一つや二つなら許してんだよ。初歩ミスとかしてる時期じゃないだろ。演奏会一週間前。暗譜してて当然だし、運指も染みついていくべきなんだ。それなのに今日のミスはスタッカートとアンダンテ、譜面の見間違いつきてる。俺だってきちんと

練習して、周りと合わせていく努力している人間に文句を言う気はない。だが、どう考えてもおかしいだろ。しかも一人や二人じゃない。こんな練習時間は無駄だと思えないな」

客に聴いてもらうという意識がないのだとは思う。それは俺に指摘されて気づくのではなく、自分たちで気づくべき、いや、本当は最初から考えておくべきことだ。コンクールとは確かに違うが、演奏会は人に聴いてもらう場所だ。音に自分の思いを乗せて届けることのできる機会だというのに、こいつらはそういうことを考えない。自分たちが楽しければいいという傲慢な意識で演奏しているから音楽にはならない。

俺の吐き出した本音は、隣のヤツだけではなく、他の奴らも刺激することになったらしい。泣き出す奴もいれば、キレてこっちに向かってくる奴もいる。譜面台にあたる奴もいた。

「……言いたいことはそれだけか」

「ああ。これ以上は自分たちで考えるべきだと俺は思うが」
いつの間にかこちらに歩み寄ってきていた部長に、シャツを
掴まれ引き寄せられる。

「お前が和を乱してるとは思わないのか。来た時からそうだった
ただろう、イライラするわ、別の曲を弾くわ。それなのに自分
たちより上手い、それがプレッシャーになるんだよ！ お前一
人の舞台じゃないんだ！」

確かに苛ついていたし、片手間に個人練習をしていた。だが、
俺に和を乱させているのは、お前らだ。俺より努力したのか、
真剣に音楽に向き合ったのかよ？

俺が物思いに耽っている間も、部長はまくし立てていたらし
い。聞いていないことに気づいたらしく、とどめとばかりに睨
んでその言葉を放った。

「お前がいなかったらよかったんだよ！」

……俺がやってきたことは全部無駄だったってことか。
導き出された答えはシンプルで、冷静になった。周りを見れば、他の部員たちが肯定している。

俺の出した答えは正解だった。

それなら去ろう。俺も自分のことに集中できる。

その時、扉が開いて、いつもの調子で佐藤先生が入室してきた。
た。

「何してんだお前ら、ミーティングか？」

この場にすぐわかない軽い口調でやってきた先生は、俺と部長を見て驚いたようだった。それは部長も同じだったようで、俺のシャツを掴む力が少し緩む。その手を引きはがし、譜面台の上にある自分の楽譜とピアノの横に置いておいた荷物を持つ。

「佐藤先生」

「どうした、湊」

「今日付けで退部します。退部しても、ご指導よろしくお願
いします」

それだけ伝えて、走って部室を出た。今までかけてきた時間
分を取り戻せるように練習しなければならぬ。

佐藤先生、ごめんな。

先生の横をすり抜けた時に残した言葉は聞こえただろうか。
散々相談に乗ってもらったのに、恩を仇で返すような形になっ
てしまったことだけが心残りだ。

昇降口まで駆け下り、靴を履きかえる。そんな俺を阻んだの
は、佐藤先生だった。

「後悔しないのか」

「明日また先生のところ、行くから。今日は放して」

周りに生徒がいないことを確認し、いつもの口調で話すと、
先生は少しだけ力を緩めてくれた。

「目を見て話せ、湊」

「今は、無理」

別に部の人間が好きだったわけではない。だけど、先程の言葉は堪えた。

冷静だった頭は、佐藤先生が入ってきたことにより、混乱している。今の状態で何かを話したところで、俺は素直にはなれない。それなら最初から落ち着いた状態で話した方が効率的だ。

紐を結び直し、先生の手をやりわりと外して、俺はまた逃げ出した。

ああ、頭が痛い。こんな時はピアノを弾くに限る。早く帰って続きを弾かなければ――。

脇目を振らず走っていたのが悪いのだろう。いつもなら気をつけていた三叉路で、大きなクラクションが鳴った。鉄の塊がゆっくりと、だが確かに目前に迫ってくる。

…：こんなところで死ぬのか。

くだらない諍いをして、子供のように逃げ出して、最期はこんなところで。

つまらない人生だ。

次のコンクールでいい成績を残したら、来年は希望していた大学から推薦をもらえそうだったのに。

未練ばかりが次々浮かんでは消えていく。

「――っ湊！」

名前を呼ばれて振り返ろうとしたところに、体が浮いて、衝撃が来る。

ああ、事故ったんだなと妙に冷静にとらえてみると、前方でブレーキ音と鈍い音、そして甲高い悲鳴が聞こえた。

…：衝撃が来たのに、何で俺は元いた歩道にいる？

白い楽譜が舞っている中、倒れていく肢体。

ここまでは、いつも見る悪夢と同じだった。ただ、倒れていくのは男性だけのはずなのに、今回は透けた小さな女の子がかぶって見えた。

なにかがおかしい。

あの日、俺を庇ったのは佐藤先生だ。実際倒れているのは、あの日と同じ佐藤先生一人。右腕が赤く染まっているのも、当時と同じなのに、あの子は誰だ。

このあとも、いつもと同じように進んでいった。先生に縋り付く俺。

わかっている、俺が悪いんだってことくらい。せめて昇降口で先生と話していたなら、あんな事故に巻き込まなくて済んだはずだったんだ。気にしなくていいなんていう佐藤先生の言葉に甘えてはいけない。罪を背負って生きていかなければ。

前以上に練習して、音楽と関係ないことを考えるのは授業中

と翔と話す時だけ。それ以外は全て理想の音楽を奏でるための時間だ。

：：だから、寝てる場合じゃないだろ。

いつまでも夢にとらわれていたって仕方がないのだと言い聞かせて、目を覚ます努力をしても再生は終わらない。焦る感情ばかりが募っていく。

———と。：：など。

俺の名前を呼ぶ声。

「湊っ！」

目の前に、翔の顔があった。

「翔か：：」

最近俺が過去にとらわれている時は必ず、こいつがいる気がする。しかも毎回俺の名前を呼んで。そこまで考えて、倒れる

瞬間に焦った翔の顔が見えたことを思い出した。

「翔かって、随分な言い草だな」

いつもなら威勢よく返してくるくせに、拗ねた声。心配をかけすぎたらしい。

「悪かった。ところでここ、どこだ？」

「病院だよ。普段なら帰ってるはずの時間に音楽室の電気がついてたから、まだお前がいるのかと思って声掛けに行ったら、倒れたんだ。最近様子変だったし、何かあったら困るから、救急車呼んだ」

迷惑もかけたようだ。友人が目の前で倒れるなんて、負担にならないはずがないのに、翔は家にも連絡を入れてくれたらしい。

「世話かけたな。ごめん」

「いいよ、別に。一応検査入院だから、土日はおとなしくして

ろよ。お前丸一日眠ってたんだし。もう、目を覚まさないかと思っただ」

丸一日。その単語に驚く。

倒れたのは木曜だから、今日は美音との約束の日だ。一度も顔を出さないことなんてなかったのに、今日はすっぱかしたことになる。

「そんな顔しなくても。一応放課後、美音ちゃんがいなか見てきたけど、いなかだったよ。……なあ、湊。変なこと聞くけど、美音ちゃんってうちの制服着てた？」

「ああ。うちはセキュリティが厳しい学校だぞ。制服を着ていない部外者なんて入れるわけもないだろ」

俺の答えに、翔は怪訝な顔をした。なんだっていうんだ、いったい。沈黙の時間に耐えられなくなったのか、翔は言いづらそうに口を開いた。

「あのさ、俺交友関係広いじゃん。前に湊に頼まれたから、美音ちゃんについて聞いて聞いてみたんだよ。知ってるかって。そしてら、全学年調べても、そんな名前の子いないんだ」

美音が、いない？

「突拍子もないこと言ってるのはわかってる。お前が俺にそんな嘘をつくはずもないってことも。だけど……美音って本当にうちの学校の生徒なのか？」

翔は疑問を口にして、それから続けた。

「他校にも聞いてみたけど、やっぱりそんな名前の子はいなかった」

そんなはずはない。

確かに美音はうちの学校の制服を着ていた。俺もあいつも音楽に關しての話しかしなかったが、特に違和感を持たなかった。百歩譲ってうちの学校じゃなかったとしても、わざわざ放課

後に俺と話すだけに忍び込むリスクを背負うことはしないだろう。

何かが、おかしい。

具体的に何とは言えない。ただ、うちの生徒でも他校の生徒でもないなら、あいつは誰なんだ。偽名を名乗る必要性も感じない。

「ま、美音ちゃんが何者かは置いといてさ。あの子が来てから、湊は楽しそうだし。仲良くなったんだろ。なら、次に会う時に聞いてみるよ。そのためにも来週には元気にならないと。二週連続で湊が来ないとか、もしも俺が行った後に美音ちゃんが来てたなら可哀そうだし」

楽しそうに笑って、春だなんて言っているこいつを殴ってもいいだろうか。

「あ、殴んなよ。いいだろ、いつも酷い扱いしてくる仕返しだ」

そう言われたら殴れないとわかっているところが、翔らしい。今回ばかりは俺も許さないといけなのだろう。

「早く良くなれよ。お前いないと学校つまんないんだからさ！」
「友達多いだろ、俺と違って」

「友達はいっぱいいるけど、湊は一人だろ」

卑屈な俺の言葉にも、当たり前前のように笑ってそう返してくる翔は、いつもより少し大人びて見えた。

翔の言うとおりに、美音に詳細を聞くためにも、早く退院できるように努めるか。病室を出て行った翔を見送りながら、来週の金曜に思いを馳せた。

「みーなとっ」

金曜日。

荷物を鞆に入れてみると、声をかけられた。こんな呼び方を

する人間は一人しかいない。

「翔」

「美音ちゃんに会いに行くんだろ。怖い顔して質問すんなよ。相手は女の子なんだから」

それだけを言いに来たらしい。お人好しもここまで行くと尊敬に値する。

「わかってる」

鞆を持ち上げ、いつもと同じ道を歩く。

美音と会ったらず、先週行けなかったことを謝って、それから先程翔に指摘されたことも尋ねなければ。

どうやら美音は既に来ているようだ。小さな音がして、ピアノの音が響く。

初めて会った時もこうだったな。

まだ出会って一ヶ月ほどだというのに、何故だか懐かしく感

じた。

「湊くん」

美音は声をかけて、俺にピアノの前を譲る。

柄にもなく緊張していた。ピアノのほうを向いたまま、謝罪の言葉を口にする。

「悪い。先週は病院にいて来れなかった」

「ううん。今日は大丈夫？」

「もう何ともない。一つ、訊きたいことがあるんだけど」

「なあに？」

「……お前、この学校の何年何組の生徒なんだ？」

一週間考え抜いた言葉で疑問をぶつけた。この学校の生徒じやなかったら、誰かの身内なのかもしれない。

美音は息を呑み、俯いてしまった。

俺も譲る気はないので、美音が口を開くまで、ピアノを弾く

ことにした。譜面を見ずに俺が弾き、美音が合わせて歌ったあの曲。

曲の最後の一音が静かになった音楽室に広がっていく。美音は俺の手が止まってから、真っ直ぐに俺を見つめていた。

やがて、美音はゆっくりと話し出した。

「私が、どこの誰かはまだ、言えないの。でも、私も湊くんには本当のことを話さなきゃいけないと思ってる」

「今じゃ駄目なのか」

「今は、無理なの。湊くんが、今度のコンクールで優勝してくれたら教える。それじゃ、駄目かな」

コンクールまでの日数はあと三週間ほどだ。それで優勝をとれるか。あの事故の前の俺なら、自信を持ってとれると答えていただろう。だが今の俺は、まだ完全には調子が戻っていない。美音と出会って、少しずつ元の俺の音に、理想とする音に近づ

いては来ているものの、自信は持てない。ここで確約は出来ない。

「あとね、そんなに長くはここにいられないの。練習も、ずっとは付き合えないんだ」

美音にも事情があるのだろう。ここ一月は二人でいたのが当たり前だったが、以前は一人だったのだし、問題はない。

「わかった」

俺の返答を聞いた美音は微笑みを見せ、俺の目前に右手の小指を差し出してきた。

「何？」

「約束。指きりしよう！」

無邪気な提案を断りにくくて右手を出せば、小指を絡められた。

子どものように無邪気に有名な歌詞を口ずさんでいる美音の

指は、細く白く、ひんやりとした温度でその存在を示す。少しだけ絡めた指に力を入れれば、美音はまた楽しそうに笑ったのだった。

* * *

時間はあつという間に過ぎていった。美音はあまり現れなくなり、来ても一緒にいられる時間は限られた。

そして三週間で過ぎた。

コンクール当日。

俺は控室で出番を待っていた。番号を呼ばれた出場者が舞台袖へ次々と消えていく。

その様子を視界の端で確認しながら、俺はテーブルの上に楽譜を広げて最終確認をしていた。……というのは見た目だけで、

楽譜はほとんど頭に入ってこなかった。想像以上の緊張感。

まずい……こんな状態で完璧な音が出せるわけがない。余計なことは考えずにコンクールの事だけに集中しなくてはいけない。そう頭ではわかつてはいるものの、心拍数はより上がっていく。今までに感じた事のない緊張感をどう落ち着ければ良いのか、俺には全くわからなかった。気分を変えるため廊下に出て小さく深呼吸をする。

「湊」

いきなり名前を呼ばれた。

「……佐藤先生……なんでここに！」

先生に会うのは事故後、一度だけ見舞いに行つて以来だった。あの時手に巻いていたギプスはとれてパツと見には怪我は完全に治ったように見えた。

「なんだ？ お前が招待してくれたんだらう？」

「それは……そうだけど」

何も控室まで見に来なくても……そう言おうとしたが、先生の笑顔に俺は何も言えなくなる。

「お前こそ、どうしたんだ、こんなところで……緊張してるのか？」

本心をつかれ俺は無言で黙り込む。

「らしくないな」

先生はそう言いながら怪我をしていない方の手で俺の肩を叩いた。

「そう固くなるな。余計なことは考えずに楽にしてたらしい」

「……言うのは簡単だよ」

それができないから困ってるんだ。そう小さくぼやくと佐藤先生はまた笑った。

「……もっと気負い過ぎた状態にいるかと思っていたが、元気

「それでよかった」

先生は勝手に頷きながらそう言った。……この状態のどこをどう見たら元気そうに見えるんだ？　そう思いつつも久しぶりの先生との会話に少しほっとした。

「まあ、とにかく楽しんで演奏できればそれでいいさ」

「……またそれか」

「一番大切な事だ。楽しくないものなど、音楽とは言わない」

「わかってるよ」

佐藤先生がいつもコンクールの出番前には決まってかけてくれる言葉だ。もはや聞き飽きて、俺の心にはさざ波さえ立たない。

「……本当に分かっているのか？」

「わかってる」

そう返事をして笑う俺に先生は溜息をついて……でも、どこ

か嬉しそうな笑顔を浮かべて見ていた。

呼ばれた出場者がまた一人控室を出て行った。

「先生……話しておきたいことがあるんだ」

「ん？　なんだ？」

「……事故の事なんだけど」

先生の手は事故後、リハビリをして普段生活していく上では支障がない程度には回復した。しかし、ピアノは………。

「お前が気にすることはない」

「先生は何度もそう言ってくれるけど……やっぱり、俺自身としてはそう簡単に流せる問題じゃなかった。しっかりと罪を背負って生きていかなくちやいけないって……そう思ったんだ」

「罪とはまた大げさだな」

「罪の罰だ。どんな曲を弾いても……死んだ音しか出なくなつた。これが罰じゃなくて、何なんだ？　でも、そんな時にあい

つと会ったんだ」

「……あいつ？」

「あいつは先生みたいに音楽を楽しむことしか考えていなくてさ。初めは訳わかんない奴だと思ってたけど……あいつと一緒に練習していくうちに少しずつだけど……生きた音が出せるようになったって俺の音楽を取り戻せた気がするんだ」

「……湊」

「六十九番さん。移動お願いします」

その時スタッフが俺の番号を呼ぶ声が廊下に響いた。

「優勝することが罪の償いになるかな？ わかんないけど……先生に見ていてほしいんだ。そのために今日呼んだんだからさ」

「湊……私は償いなどいらな……お前が楽しければそれでいいんだ。行ってこい」

俺は頷いて一步を踏み出した。

盛大な拍手の中、俺は舞台上上がった。

鍵盤に指をそえる。大丈夫だ……美音と共に練習した時のような旋律を奏できればいい。

拍手が鳴り止み、一瞬の静寂が訪れる。

俺は鍵盤に指を落とした。

通い慣れた道をただ一心に走り抜ける。

コンクールが終わってすぐ、俺は挨拶もそこそこにバスに乗り、高校へ向かった。バス停を降りて、そこからただひたすら走っていた。

美音に会いたい……そのためには一秒でも無駄にしたくない。その思いが俺を駆り立てていた。

美音はどんな反応をするだろうか？ 普通に驚くか？ それ

とも泣き出すか……？

案外いつもと変わらずにただ笑っているだけかもしれないな。そう思い少し口元を緩ませながら俺は道を走り続けた。

廊下と第一音楽室を通り過ぎ階段を足早に上がっていく。第二音楽室に着き扉の前に立つと少し呼吸を整える。部屋の中からはピアノの音は聞こえない。俺は空いている方の手でドアノブを掴むとそれを回してゆつくりと扉を開けた。

「美音。見ろ。約束通り、優勝したぞ」

美音は……そこにいた。ただ、いつもとは違い……その手にはきれいなバイオリンを持っていた。

——みなとくん。

頭痛が走る。一人の小さな女の子が俺の名前を呼ぶ。

——そんなに緊張しなくていいんだよ。ピアノを楽しんで弾けばそれがみなとくんの音楽になるから。

その子は手に持っていたバイオリンを弾いて俺に笑いかけた。何なんだ……これは俺の記憶なのか。俺に笑いかけていた女の子が次の瞬間、血を飛び散らせながら倒れていく姿に変わる。それはいつか夢で見た女の子と同じで……そして……その女の子が今の美音と重なっていく。

カラーン！

持っていたコンクール優勝の楯を俺は手から落とす、倒れそうになるのをギリギリのところまで踏ん張って、床にひざまづいた。

「湊くん！ どうしたの？」

美音は持っていたバイオリンをピアノの上に置き、俺に駆け寄ってくる。

「疲れてるのかな……とりあえず横になった方が……」

「美音……お前……みおん……なのか？」

「……え？」

驚く美音に俺は続けて言った。

「あの時……俺を励ましてくれたのは……事故から助けくれたのは……美音なのか？」

美音は目を見開いてじっと俺を見つめていた。

「……思い出したんだね？」

しばらくして、美音はとても哀しそうに呟いた。その言葉に俺は静かに頷いた。

「そっか」

俺ははっきりと思い出した。七年前にも俺は事故に遭いかけて助けられたんだ。

あの日コンクールで初めて会った美音に。

「……ごめん」

美音はピアノの上に置いたバイオリンを見ながらそう言った。

「何で……謝るんだよ」

「……邪魔になると思っ……湊くん優しい……私の事なんかで苦しんでほしくなかったから」

「ふざけるなよ！」

俺が怒鳴った声は音楽室内にピンと張り詰めて響きわたる。美音は驚いて肩を震わせる。

「忘れられてたんだぞ……自分を犠牲にして助けたのに……前はもう死んでしまったのに……なんで俺は生きて音楽を楽しむことができてるんだよ……おかしいだろそんなの」

言っている途中で俺の目から涙が溢れだし、床に水滴が落ちていく。

あの日、俺は自分の出番を前に緊張していた。努めて表には出さないようにしていたが、美音はそれを簡単に見抜いて俺を励ましてくれたんだ。そのおかげで俺はコンクールで初めて優

勝することができた。嬉しくて……早く美音に優勝の楯を見せてやりたくて、俺は美音のもとまで走って向かって……そして車の前に飛び出してしまった。

「……俺はずっと忘れてた……お前のこと……全部……お前のおかげなのに……何でだよ……恨めよ」

「……どうして私が湊くんを恨まなくちゃいけないの？」

美音が静かに発したその言動に俺は一瞬訳がわからなくなる。「初めて湊くんを見た時すごいなあって思った。ビデオだったから直接聴いたわけじゃないけどピアノの音がすごく響いて……会ってみたいなってずっと思ってた。あの日、初めて会った私の下手なアドバイスを喜んでくれて……優勝して真っ先に私のところまで走ってきてくれて……本当に嬉しかった。……そんな湊くんを恨むなんてあるわけないよ。これまで通りピアノを弾いて私の分まで生きてくれたら……それだけで私幸せだよ」

美音は笑顔を向けて言った。俺は何も言えなかった。黙り込む俺に美音は続けて言った。

「……湊くんを助けたことに後悔はない。それははっきりとそう言える。……でも、お父さんのことが……ちよつとだけ心残りだったの」

「……お父さん？」

「佐藤先生ってあなたたちが呼んでる人」

美音が答えたその名前に俺は驚く。先生に娘がいたなんて……聞いていなかった。

「湊くんが忘れてるならその方がいいってお父さんも思ってた。前と変わらずピアノを弾く姿を見て安心してたよ。お父さんは湊くんのピアノの大ファンだから……私が嫉妬しちゃうくらいにね」

笑いながら言う美音に俺は静かに言った。

「先生は……俺のこと恨んでないのか？」

「恨んでたら湊くんの世話なんか焼かないと思うし、事故の時だって助けないと思うよ」

美音の言葉に案外すんなりと納得させられた。先生は本当に昔から俺に優しくしてくれた。美音は少しの間黙って静かに続けた。

「……このバイオリン……本当はお父さんが私のために用意してくれたものだったの。私が死んだ時……まだ七歳だったのにこんなきれいな……高い物用意してくれて……ほんと気が早いよね……でも、嬉しかった」

美音はバイオリンを愛おしそうに撫でる。

「私が死んでも捨てられなくて……学校に寄付したんだけどね。本当にお父さんは優しく……良い人なんだ。最後にありがと……うって言う……これを弾いてあげられたらなって……そのた

めにお父さんに姿が見れるようにここにとどまっていたの」

美音の言葉を聞いて俺はあえて問いかけた。

「それも……俺のために……使ったのか？」

「うん」

美音は静かに笑った。その笑顔を見て余計に俺はやりきれない思いを感じた。

「何で……そんなこと」

「お父さんが事故に遭って一番苦しんでるのは湊くんだった。

だから……力になりたいって思ったの。湊くんがまた前みたい
にピアノを弾けるようになればお父さんだって喜ぶし、今、湊
くんを支えてあげられるのは私しかいないから」

美音はそう言うってから俺に向き直った。その真っ直ぐな瞳を
俺は見つめ返すことしかできない。そして、美音が続けて言っ
た。

「ここに姿を出していられるのは……どう頑張っても二か月がギリギリで……今日でもう限界かな」

「じゃあ、今からでも先生を呼ばないか？　まだ間に合うかもしれないだろ？」

「そうかもね。でも、もういいかな」

美音は俺が何か言うよりも先に続けて言った。

「お父さんはもう私の事は乗り越えてる。たまに泣いている時もあるけど……ちゃんと前を向いてる。今私がお会いすればそれを邪魔することになるかもしれない。……よく考えたらその可能性の方が大きいってことに気付いたの。だから、もういいの」

夕暮れの光を背に受けて笑顔で立つ美音の姿を見て俺はこの第二音楽室で最初に美音に会った時を思い出す。ただ、今は美音の姿は光を通して半分透けているように見えた。

あの時から美音は俺のためにピアノを聞いているんなアトバ

イスをしてくれて力になろうとしてくれた。俺がスランプを抜けることができたのも……今生きているのだって美音のおかげなのに……俺は何一つ返せないのか。

「何か……俺にできることってないのか？」

美音を真っ直ぐ見つめてそう問いかけると美音は笑顔で答えた。

「……湊くんならそう言ってくれと思った」

そういうと美音は笑顔でこう言った。

「じゃあ、一つだけお願い、訊いてくれない？」

「……え？」

少し困惑する俺の横を通り過ぎて、落としたままだった優勝の楯を拾いそして言った。

「……ピアニストになる夢を捨てないでいてほしいの」

「ピアニスト？」

「湊くんの夢だよ。音大に進むことも考えてたんでしょ？」

美音の言うとおりで音大の事は考えていたし、ピアノニストを目指す気持ちもあった。だが……。

「たしかにそうだけど……何でそんな事わざわざお願いするんだよ？ もっと他の事にした方が……」

俺の言葉に美音は静かに首を振った。

「私の願いはね、いつか私が生まれ変わった時に……また湊くんと出会いたい……それだけなの」

そう話す美音の声は途中から途切れ途切れになる。見ると美音の目からは涙が零れ落ち、その水滴が腕に抱えていた楯に落ちていく。

「……美音？」

「本当はもっと一緒にいたかった……でも、今の中途半端な姿のままじゃ無理だから……生まれ変わったら、すぐに湊くんに

会いに行きたい……だから……」

「……わかった。絶対に有名なピアニストになる。美音がすぐ俺を見つけれられるように」

美音を真っ直ぐ見つめそう言い切ると美音は安心したように笑った。

「ありがとう。……約束だよ？」

「約束だ」

そう言って俺は指きりしようとする美音の横を通り抜けピアノの前に座る。一瞬、俺の意図がわからない様子だった美音もすぐに意味を理解し、楯をピアノの上に置いて、代わりにバイオリンを持つ。

「何の曲にする？」

「そうだな……」

出来るだけ楽しい曲がいい。そして少しでもこの場にあった

曲……。

「……『カノン』にしない？」

「……『カノン』はどうだ？」

見事にハモった曲名に互いに一瞬驚いた後、同時に笑う。

それから二人で軽く手慣らし程度にそれぞれの楽器を合わせて弾いてみる。

俺自身もこの曲は数年前に弾いて以来になるが、楽譜は頭に残っているので間違えることはない。後は、肝心の美音がちゃんと『カノン』を最後まで弾ければいいが。

「湊くん……」

俺が考え事をしてしていると、美音が俺の名前を呼んだ。しかし、そこから何も言わない美音に俺は首をかしげる。

「……何でもない」

ただ笑顔を向けるだけの美音に俺は「何だよそれ」と心の中
で思いながら困ったように笑い返す。

この約束を忘れないように……指きりよりも絶対的な約束の
証。

少しの間……場が静寂に包まれる。

そして、俺達は奏で始める……一時の切ない思いを載せて。

美音の凛としたバイオリンの音色と俺のピアノが紡ぎだす旋律
はすごく単調な物なのに何故か俺の心は弾んでいた。

曲が一番の盛り上がりに入り俺は美音を見た。美音は楽しそ
うな笑顔を俺に向ける。その姿があまりに綺麗で……今、この
瞬間だけが時間から切り取られているような……そんな気がし
た。

不意に……自分の意識が朦朧としてくる。そしてバイオリン
の音も静かに聴こえなくなっていた。そして……。

「……」

俺は変わらずに、ただピアノの前に座っていた。

「……美音」

夕陽で赤く染まった教室を見回した。

「……夢だったのか？」

誰もいない教室で一人そう呟いた。……何気なしにピアノの上を見るとパイオリンと優勝の盾が目にとまった。

「……何で濡れてるんだ？」

よく見ると楯には水滴がついて濡れていた。いつ濡れてしまったのか？

そして、ふっと美音が泣いている姿を思い出す。

美音は……たしかにここにいた……！

「 …… 美音 」

眩くように名前を呼び、楯にふれる。

「 …… ありがとう 」

クリスタルで出来た楯は夕陽の光を受けてキラキラと光って
いた。

赤の狩人



この国の人々は数百年の間、オオカミと戦い続けてきた。オオカミはあらゆる面において、人類よりも優れていた。人の皮膚を軽々と切り裂く鋭い爪と、骨を易々とかみ砕く強力な顎を持ち、何キロも先からおいをかぎ分ける嗅覚、森の葉の落ちる音も聞き取る聴力を持っている。時には知恵でさえ、人に勝ることもあった。

しかし、人類は一方的に負け続けてきたわけではない。オオカミに立ち向かうため、人々は勇気あるものたちを集め、訓練を積んだ。人は彼らを、その服装にちなみ「赤の狩人」と呼んだ。

獣の遠吠えが聞こえた。

書齋で調べものをしていたネコタは、ふと窓の外を見た。

「遠いな」

緊急の連絡もないようだ。ネコタは読みかけていた書物に視線を戻した。

ふと、何かの気配を感じた。振り向くと、少年が立っていた。

「勝手に入るんじゃない！」

少年はボソボソと何かを言ったが聞き取れない。

「何だって？」

「……ね、ねむれない」

（どうして俺にそれを言うの？）

「何か飲んでから寝るか？ ホットミルクとココア、どっちが

「いい？」

「ミルク！」

ネコタはキッチンでミルクを鍋に入れて温める。

「蜂蜜、入れる？」

「入れる！」

少年が飲めるように冷やして、目の前にカップを置いてやった。

「なんで、俺の所にくるのかな」

無我夢中でミルクを啜る少年を観察しながら、ネコタは呟いた。

「美味しい！」

「それはよかった」

読みかけていた書物に再度目を落としたネコタは、適当に相槌を打つ。

「お兄ちゃん、何を読んでいるの？」

「難しい話だ」

「ふーん」

「飲み終わったら部屋に帰りなよ」

近ごろこの少年は、どこかが変だ。無邪気さの影に隠された、不穏な気配。それが杞憂であってくれれば、とネコタは思った。

翌日、オオカミの目撃情報が入った。早朝から隊員全員が広間に集められてオオカミを駆除する作戦が発表された。

「まず、狙撃班と陽動班に別れて行動する。狙撃班は木の上から陽動班を追いかけるオオカミを撃て！ 陽動班は生き延びることだけを考えろ！」

「ソウマ、大丈夫？」

隣に立っていたエリスが心配そうにソウマの顔をのぞき込ん

だ。

「え……うん」

「体調が悪いなら、今回は欠席した方が……」

「狙撃班は……ソウマ。お前が隊長だ！」

教官の口から告げられた名前に、訓練兵たちはみな驚いた。

「作戦はすでに伝えたとおりに。各班、無事に帰還しろ！」

話を締めくくった教官は、戦闘準備に取り掛かる隊員たちの

間を通り抜けて、ソウマの元へと歩いてきた。

「初の隊長任務だ。頑張れよ」

これから起こるであろう戦闘に、ソウマは不安を覚えるばかり

だった。

拳銃を握る手が汗ばんでいた。呼吸間隔は短くなり、心拍数も上がる。

「こんな事じゃダメだ」

銃を持つ手がぶれないよう木に背中を押し付けた。

茂みが揺れた。

赤いマントが駆け抜けていく。陽動班の誰かだ。

オオカミが背後に迫っていた。数は四匹。地面を掻く鋭い爪

の音が響く。

引き金をひいた。

狙いは外れた。

恐怖という名の紐に縛られ、反応が一瞬遅れたのだ。

長い悲鳴が森の中を駆け抜けた。

ソウマの顔から血の気が失せた。

オオカミたちは賢かった。すでに肉塊となった人間は捨てて、

すぐにソウマを目指して駆け寄ってくる。

（死ぬ！）

不意にぼろぼろと涙がこぼれた。
パシュッと空気を切り裂く鋭い音が、ソウマの耳元をかすめた。

オオカミたちは後ろに飛びのいた。

「ソウマ隊長、無事？」

エリスの声。

ソウマは頷く。

「だったら、早く指示を！」

「エリス、そいつに指示なんかできるもんか！」

「そうだっ、なんだって『泣き虫』だからなっ！」

集まってきた仲間たちの罵声。その声をかき消すように吐き出される銃弾の嵐。

オオカミの群れはたちまち蹴散らされた。

本部に連絡を取っていた兵士が大声を上げる。

「街の方は避難をはじめたそうだ。俺たちも向こうに合流した方がいいかもしれないぞ！」

ざわざわと他の兵士たちが不安の声を上げる。

「エリス：：どうしたら：：！」

「しっかりして！ 君が隊長なんだから！」

「仲間の死体をどうしよう：：！」

「こっちは私が何とかする！」

「じゃあ、僕たちは街へ向かうよ！」

「そうして。ここにはすぐにネコタ団長も来ることになってい
るわ」

「アイツ、なにやってんだ？」

誰かが呟いた。

背後にフェンが立っていた。いつもの無邪気な顔ではない。

肉食動物特有の鋭い目つき。その目線の先にはエリスの姿があった。

「なんで、フェンが？ ネコタさんじゃないの？ あの子は今、本部にいるはずじゃないのか……」

驚くほどの距離を、フェンは一気に飛んだ。鋭い爪がエリスの左頬をかすめる。

ソウマはフェンとエリスの間に立ちはだかった。

「お前一体、何者だ？」

「君たち人間ってバカだなあ」

鼻で笑い、首を左右に振る。

「僕はフェンリル。オオカミの王様さっ！」

地面を強く蹴り、ソウマとの間合いを一気につめる。

とっさにかわそうとしたが、前足の一撃を受けて、軽々と吹っ飛ばされた。

「さあ、もう終わりだ」

一発の銃声が響いた。

「離れなさい」

銃を握ったエリスが割ってはいる。

フェンは笑った。

「生意気なやつ」

「こっちは大丈夫。間もなくネコタ団長も来るはずだから。ソウマ隊長は街へ！向こうを助けなきゃ！」

エリスはフェンリルに向けて発砲するが、その銃弾は軽々とかわされた。

「エリス！」

「早くっ！みんなの元に！」

フェンリルの頬に笑みが浮かんだ。

「エリス！ネコタさんが来るまで頑張るんだ！僕もできる

だけ早く戻る！」

ソウマはきびすを返すと、森へ駆け込んだ。

エリスの腕は一級品のはずだった。

が、オオカミの王と名乗ったそいつには、一発も通用しなかった。やがてカチリと非情な音がして、銃弾は尽きた。

「遅い遅い。そんなのじゃ、日が暮れちゃうよ。弾込めの訓練にもっと時間を費やすべきだったね」

もうネコタが現れてもいいはず。だが、その気配はなかった。予備の弾を込めようとする手が、焦りのために震えた。

「ほらほら、知らないよ」

エリスの震える指が、弾倉をどうにか送り込んだ。

次の瞬間、鋭い爪がエリスの首筋を引き裂いた――。

綺麗な赤が飛び散る。

エリスの体は糸が切れたかのように地面へと崩れ落ちた。

その一時間ほど前のこと――。

「な――に考えてるのかな」

ネコタの肩をポンと誰かが叩いた。振り返ると、フェンが立っていた。

「ソウマのことさ」

「初めての隊長任務だね」

「うん、あいつ、もとは泣き虫小僧だったんだよ。それがここに入ってほんと立派になっちゃってさ」

「そうなの。優しい顔してるけどね。その優しさに正義感を足して、銃の腕も上がったたら、もう言うことないね」

「だな。よかったよかった」

「ところで、お兄ちゃん、ヒマ？」

「ふざけるんじゃないよ。これでも、出ていった隊員たちの無事を祈っているのさ。さて、俺もそろそろ出かけるか」

ネコタは幹部としての一面を見せつつも、フェンの前では普段より柔らかい顔をしている。

「飲み物ちようだい」

「またか」

ネコタはやれやれという表情で、席を立った。

背中を見せたその隙に、フェンは小さな包み紙を取り出し、中身をさらさらとネコタのカップに落とす。

「ココアしかねえぞ」

「いいよ」

フェンは空になった紙を丸めて、ゴミ箱に放り込んだ。

ネコタがフェンの前にココアのカップを置き、自分は飲みか

けのコーヒーを口に運んだ。

一瞬、眉を曇らせる。

「何？」

「味が変なんだけど……」

「気のせいじゃない？」

「そうかな……」

言い終わる前に、ネコタの体が椅子から崩れ落ちた。

（本当にお兄ちゃんにも、ソウマさんにも感謝しているよ。ここまで僕を本当の家族のように育ててくれて。でもさ、こんな長くと一緒にいるのに、僕の正体に気付かないなんて馬鹿だね。ある意味悲しいよ。そして楽しみだ。君たちのような馬鹿正直な奴らと戦えることがね）

「ソウマ隊長！」

隊員の一人がソウマの元へと駆け寄ってくる。街へはまだ数キロの距離があった。

「間もなく住民の避難が完了します。指示を！」

「どうやら、思ったよりも早く片付いたみたいだ。」

「ネコタ団長は？」

「今日は姿を見ていません」

姿を見ていない？ 直接エリスのもとへ向かったのか？

いや、それは変だ。ネコタ団長はソウマたちと別れて、街へ向かう予定になっていたはずだ。

ソウマはイヤな予感がした。

「住民の避難はもう完了するんだね？」

「はい」

「だったら、僕は必要なさそうだ」

ソウマはきびすを返した。

「ソウマ隊長！ どこへ？」

戸惑う隊員を置いて、全速力で走る。

いくつかの茂みを抜けた。銃声は聞こえない。

エリスはどうなったのだろうか？ 一人つきりじゃ、あの化け

物に立ち向かえるとは思えない。

ネコタがとつくに現れて、敵を倒してくれていることを祈った。

やがて、木々が開けた場所へ辿り着いた。地面に横たわるエリスの姿があった。

「ど、どうして……」

白銀の巨大なオオカミがエリスの傍らにいる。まるで舌なめ

ずりをしながら、笑っているように見えた。

ソウマはゆつくりと息を吐く。ホルダーから拳銃を抜き、ポンのポケットから銀色の弾丸を取り出した。

隊の幹部にしか渡されない貴重なそれを、ソウマは銃に詰めた。ゆつくりと狙いを定めて、引き金を引こうとした。

その瞬間、ソウマの右側の茂みが揺れて、数頭の黒い影が飛び出して来た。

一瞬銃口がそれた。

「死ね、小僧！」

フェンリルが目の前に立ちはだかった。鋭い爪が伸びてくる。ソウマは寸前でかわして、茂みの方へ転がった。

左肩の肉が剔られていた。鈍い痛みを耐えて、ソウマは引き金を引いた。

空中高く躍り上がったフェンリルの体が、銃弾を受けて地面

にもんどり打った。

胸元から流れ出る血をソウマは見つめた。

「終わった……終わったんだ。エリス、ごめん。こんなことになるなんて……」

天を仰いだソウマの意識は、そこで途切れた。

フェンリルは体をゆっくり起こし、ソウマを見た。

銀の銃弾は心臓を貫いていた。体は限界に達している。いまだ意識を失わなかったのは、人間に対する憎悪の深さゆえだった。

「ふっ……止めを刺さなかったのが命取りだ。もう一弾用意しておくべきだったな」

フェンリルは意識がないソウマに近づき、大きく口を開けた。その時、ガシヤとフェンリルの頭部に銃口が突き付けられた。

「……それは困るんだよね」

「っ……お前、生きていたのか」

「勝手に人を殺さないでくれるかな？　俺はそう簡単には死なないよ」

「お前は確かにあれを飲んだはずだが……」

「すぐに解毒剤もね。止めを刺さなかったのが命取りつてのは、そっくりそのまま君に返すよ」

ネコタはへらへらと笑って見せた。

フェンリルの目からはもう光が失せようとしていた。

「……完敗だ。だが、オレを殺したところで同胞の侵略は変わらん」

「わかってるさ。さあ、もう楽になるがいい。俺たちの愛したフェンをいつまでも苦しめたくはないから」

静かな森に銃声がこだました。

「もつともつと生きていて欲しかったエリスの仇も、この手で討ちたかったしね……」

そして、倒れたままのソウマに視線を向けた。

「ホント、やっかいなヤツだなあ」

「んっ……あれ？」

目を覚ましたソウマは、見慣れない天井を見て声を上げた。
微かに香る消毒液の匂い。

「医務室？」

「そうだよ」

耳元で答えた声に、ソウマは肩をびくつと上げた。

「目が覚めたようだね」

「ネコタさんっ！」

ネコタが微笑みながら、寝台の隣にある椅子に座っていた。

慌てて体を起き上がらせたソウマは、左肩の痛みで顔を歪める。

「まだ、寝ていたほうがいいと思うよ。結構深手だったみたいだし」

「はい……」

「俺が見ていた感じじゃ、捨て身の一撃だったよ」

他人事のように怪我の説明をするネコタの言葉を聞いて、ソウマはあの光景を思い出す。

「あの……フェンリルは？」

「死んだよ」

「そ、そうですか」

「まだ君は隊長を辞めたいかい？」

「えっ……僕は……」

一息付くと深呼吸してから言葉を続けた。

「隊長を続けます。僕は今回の件で大切な人を失いました。でも、それが理由で責任を逃れようなんて考えたくない。僕は：彼女の分まで赤ずきんの隊長として生きたい」

ネコタをしっかりと見て話すソウマの目には、揺るぎない決意が込められていた。

「その返事が聞けて嬉しいよ。君が隊長じゃないと今後の活動に支障が出るんだよね」

「へ？」

「早い話が、人手不足なんだよ：：てへっ」

「：：は？ それだけ？」

「そう。だから、ソウマくんには引き続き隊長で居てもらいます！ あと、俺の補佐もお願いねっ！」

「なんで役職が増えてるんですか！」

医務室を出ようとしたネコタが、思い出したかのように振り

返った。

「動けるようになったら中庭に行っておいで」

「中庭？」

「うん、まだお別れを言ってないだろ？」

数日後、歩けるまでに治ったソウマは中庭に立った。

日当たりのいい場所に二つの墓石が並んでいた。周りには無数の花束が飾られている。

——歌姫エリス　ここに眠る——

その傍らの墓石に彫られていたのは……。

——我らが友フェン　ここに眠る——

ソ
ウ
マ
は
ふ
と
思
っ
た
。

い
つ
の
日
か
、
人
と
オ
オ
カ
ミ
が
と
も
に
暮
ら
し
て
い
け
る
世
界
が
訪
れ
な
い
も
の
か
と
。